

裡 裡

句 逝 0 覚

抄 ………………………………………… 公七 一 公

私 雑

品品

二月號目次

(昭和二十九年)

夢裡逝く(1だ)	大阪の灯東野大八…(コラ)	川柳覚書麻生路郎…(三)	祝「旅 人」富士府鞍馬···(二)	川柳を斯く思う八木摩天郎…(ご)	平 重 盛(下)富士野鞍馬…(三)	に就いて思う麻生路郎…(三)	現代川柳への私見川端 柳風…(三)	ついて誇る 松闊、摩天郎、春巣…(2) 時事川柳に 路郎、葭乃、栗、小	表 紙米田三男之介	題 字麻生 路郎
柳界展望(云)	不朽洞会から(三)	各地柳壇(兴)	路集		同舟近跡諸家…(員)	川柳塔麻生路郎選…(へ)	不朽洞句帖麻生 路郎…(三)	芳泉氏々偲ぶ弘津 柳慶…(忌)	飛燕往来(三)	うそと川柳久保 和友…(三)

私の若い頃の作に

就いて思う 思う」と云うことに

ても愉快なことであ ないことはわかつてい 忙しくてとうてい行け 思うことは、ホントに も行つて来たいなアと ある。一ベン温泉へで ない場合もあるようで かし思わないでいられ いて、何かしら思うて である場合もある。し が、非常に悲しいこと とである場合もある その人の人生にとつ いるものである。 て、いかにも楽しいこ 思うと云うことが、 人間は常に何かにつ を高めんか 妻や待たむ靴音

なことである。 などと思うのも、愉快 りをどんなにか待ち遠 しく思つているだろう ながら、妻が自分の帰 ひけて、家路へいそぎ 若い時分には会社が

も月給の方を待つよう ぐに戻つて来るやろか るから、いつのほどに になるからである。 と、夫の帰ることより か、月給日に、真ツす も胸をドキーへさせて 年とつてからよりも、 も若い時には限らない うした思いは、必ずし ては心臓が続かなくな 夫の帰るのを待つてい しても、そういつまで つてしまう。要の方に うなどとは思わなくな と、要が待つてるやろ よらに思う。年をとる 若い時の方がより強い が、感激のデグリーは と云うのがあるが、斯 **葭乃の中年の頃の句**

刺身も色変る お帰りにならず ことによつて歌が生ま

せんないことも思うも 云うような、思うても だ生きててくれたらと はない。あの子が、ま は楽しいことばかりで かし、思うと云うこと えていることが旬の外 身にかこつけてはいる に済まぬ訳である。し に溢れている。まこと が、切々の情をうつた の句などを見ると、刺 と云うのがあるが、こ 昔の歌人で、

る。そして、そう思う も、思わずにはいられ ないから思うのであ んないことだと思うて んでいるのがある。せ と云う歌を詠んで悲し はものを思わざり 心にくらぶれば昔 逢い見てののちの

いくらか慰められるの れ、その歌によつて、

て無限の広さを持つこ 過去、現在、未来に対し いの世界と云うものは は非常に狭くても、思 現実の世界と云うもの 場合がないとも限らな 私に好感をもつている も知れない。あの人は とが出来るのも面白い から感じとつてくれる なアぐらいはその表情 で思わぬよりはいいか 思うただけでも、てん では何んにもならぬや と云う。思うただけ うと思てましたんや がめると、そう云お わねばならぬことを云 とばかりではない。云 楽しいことや悲しいこ いかんと思う。しかし い。思うたらやらねば 思うただけでは貧しい い人に、金をやろうと 故云わないのだ。貧し ないか、思うたら、何 云わなかつたのかとと わなかつたので、なぜ 人を救うことは出来な その人の生きている しかし、思うことは からである。

ことだと私は思つてい

なつたら、吉川英治と が出来る。イヤ後世に 扱つたのだと思うこと 実在した人間のように ウをかけて、いかにも ことが出来る。それを 家が飯の種にデッチあ 来る。アレは昔の小説 げたものであると思う かつたと思うことが出 この世に実在の人でな 小説家が更にシンニュ 吉川英治と云う筆豆な 仮りに、宮本武藏は

思いを思いつづけてい うなんて思うことも出 るのである。(路) 来る。思うと云うこと 云ら小説家が、兼行法 したいと云う大それた 音字の中に圧縮して遺 思いを私は川柳の十七 る。その果てしのない てしのないものであ は何処まで行つても果 に、あんな長つたらし て、つれんしなるまま い小説を書いたのだろ 師などと同一視され

不朽洞句

麻 生 路 郞

はなみづを垂らして利権漁つとり 温泉にひたりぼられた話が出 樂燒へ下手くそ同士仲がよし 汽車が走る汽車が走るみかんを縫うて 円月島誰か覗いて欲しい島 白浜でなるほどと云う砂を踏み アメリカは見えねど千畳敷に佇ち 政治屋 白 一浜行



て就に柳川事時

郎 麻 生

郎天摩木八

義的のものとして扱はれて居り

は詠史川柳などと同じ様に第一

抜きを示し乍ら)時事吟には新 と題して書いたが「新聞の切 路郎=最近山陽新聞紙上に、 ませんか。 僕が「時事吟を作られる方に」 加えて頂くようなことはあり 春集=これに対して何か付け

生の句に

して、次のように書いてあり 句に就て」と云う章がありま 講座」の中に「時事を詠んだ 摩天郎=路郎先生の「新川柳 ことからお話し願います。 とはどんなものか。」と云う 一度読み上げて見まし

采を博するのを主眼として居る では時事吟と称して居ります。 あらゆる事象を詠んだ句を川柳 省を目的として作句されてゐる やうであります。時には意識的 の味を強烈に放出して世人の喝 こともあります。しかし詩味に にある種の人達を諷し、その反 新聞記事になるやらな社会の

稀薄になる点から、川柳として 句の生命が、句によっては特に 乏しい点と、時の流れによって 句に、

路郎=人情味を掴んで詠 想が入るから句の生命が長續 情であるが、そこに作者の思 限らず、一般に万代不易の人 小松園=これは奄美の復帰に 事件だけを取上げたのでは駄 ば、時事川柳も命があるよ。 きするのでしよう。

で、犯人が捕えられた時、 小松園=七百万円の盗難事件 先 葭乃=時事吟は歴史的の事件

重橋事件」がこうのと云つた の休業した折、先生の句に 取上げられている保全経済会 摩天郎=今新聞でやかましく て「李ライン」がどうの「二 鮮さが第一だね。今頃になつ んではねー。

月二分の悲劇泣いたりわ

路郎=奄美の復帰の折の私の ら分りませんでねー。 ますなア。 日が経つと刺戟がうすくなり まつしやろ。 栞=盆々大事件に発展してい 済会事件はどうなつているや に雜誌が出る頃には、保全経 小松園=実際時事川柳は、 と云うのがありますが、三月 月

ら、もう新聞では載せたがら

ねからね。

貧乏であつても里の方が

小松園=昔の事件は一家心中 件でないと、一般の関心が少 件が多いから、よつぼど大事 位でよかつたが、此の頃は事

は頭に残つていますなア。 待つたなしの步に刺され たる犬養穀

あるが、これを今作るとすれ 路郎 = これは当時の時事吟で ば詠史川柳と云う訳だね。 は誰と誰の首か説明がいりま 栞=事件が大きいし… 春寒し拾ひ手のない首二つ

その金であゝ家も建て貯

春巣=ではそろ~~始めて頂

路郎=全くその通りや。 と、も一つやなア。(笑) 此の句、その時にはよい句だ 葭乃=防衛問題で と思つたが、今になつて見る

路郎=それにもう一つ、 のが難しいですなア、此の頃 あれがよかつたですな。 のが十日で、十日我を作つて は事件が多いから。 小松園=句にする事件を掴む 夏の夜蚊帳はいらぬと云 新聞に載るのが十二日な

路郎=句の巧拙は別として、

るわけですね。同じニュース やつたら、詠史川柳として残 分りますからね。 バリューのある事件でも、 から歴史的のものかどうか

つて来る。 た。從つて詠史と云つても違 どを教えるようになつて来 近では学校でも社会の組織は うな場合でもいゝわけだ。最 く、経済機構が変ると云うよ ても、英雄の活動だけでな 路郎=歴史的の事件とは云つ

局一手あるように思う。時事 つて来ましたね。見方には結 小松園=歴史を見る見方が変 柳を詠んで、川柳の持ち 川柳味を活かしたのは残

柳ではダメだね。 路郎=意味が判つても報告川 分るのは残りますね。 葭乃=その句だけで、 意味の

あしが分るかどうかゞ問題で 摩天郎=先生の句集にある 世は末か神様までも左前

ンと来ません。 ではないので、今の人にはピ の頃は復古調で神様は左前 時事川柳ではあつても、

て来る。それで川柳家に取つ 時事吟は日が経つに連れ、匂 意味が逆に取れるものさえ出 いや味が稀薄になる、中には て時事吟は第二義的のものだ

と云える。

栞 = 摩天郎さんの お母ちやんく一云うて流

くて二行、三行に及ぶのもあ りますなア。中には前書が長 分りませんなア。 前書がなかつたら何の事やら がついている時事吟ですが、 い人は前書付きの句をよく作 小松園 =川柳でも俳句でも古 「紀州水害」と云う前書

よ。 葭乃=前書の句は卑怯です

る。

命がなければ本当の句ではな としてはその句が出来た当時 路郎=前書と云うものは作者 校の横に住んでいて、 い。ロンドンの死んだ時、学 だが、これを切離して句の生 の記憶として、つけたいもの

小松園=その当時は分つて

、振返つて見て、句のよし

子を死なし学校に子の多 いこと

人も自分の子供が死んだ時、 ンドン死す」と入れる。がこ 仮りに前書がしたい時、「ロ 僕の子供だけでなく、よその れと切離して考えて、これは

省して見る必要がある。 作者は作つた時、前書がなく たのである。前書の力を借る めに前書を付けたいので付け が、僕はロンドンの記念のた この句は生命があるのである に違いない。で前書なしでも 小松園=先生の ても意味が通るかどうかを反 意味が取れぬ様では駄目だ。 人が多いが前書がなかつたら

路郎=「忠義」の句を明治時 は、やはり時事吟ですか。 栞=当時の時事吟ですね。 古くとも僕には仁義禮智信

ね て何や」と云う風に近頃の若 小松園=そうですね。「孝行 づれがあるよ。 い人は云うかも知れません

ね。先生の **奨**=「家」の問題でもそうだ

人類は悲しからずや左派

れぬが、ソ聯と米国とは恐ら うと思う。社会党は或は一本 路郎=同じ時事吟でもこの句 にまとまることがあるかも知 などは比較的生命が長いだろ も時事吟ですなア。

が聞えると悲しみの情が起る 学校の校庭でワーツと云う声 「古くとも」にしても「人類」は 長と学生、工場でも労資が 邦」は夢だ。学校で云えば校 く一本にはなるまい。一世界聯 詠んだ訳ではない。 た訳で、時事を詠むつもりで にしても私の思想が句になつ つになることはむづかしい。

路郎=いや違う。「人類は…」 栞=これは社会党を詠まれた のですか。

で分るだろう。 会党ですか。 小松園=(葉に向い)あんた社

に詠んでいるのとでは時代の 代に詠んでいるのと、敗戦後 は歩み寄つて来ますな。似た 者夫婦と云うよりは、むしろ 小松園=酒の話ですが、夫婦 党とも考えられますな。 栞=私はカラ党の方で…。 「左派と右派」は又甘党と辛

かり云うて、不眞面目なと云

国家の進展には左派、右派は うちの家内でも酒を飲み出し あつてよいでしよう。 た。夫婦の域に迄達すると、 互いに似て来るのですなア。 左派も右派もないですな…。

判を加えているのだ。所で終 ア。これは理窟ではなく、批 ずや」としていますからな 詠んではいない。「悲しから 栞=川柳家はそんなつもりで ましたなア。 戦後時事吟は各自が持つてい

路郎=戦時中から戦後へかけ

吟であつた。 小松園 = 戦時中も殆んど時事

葭乃 | 戰時中私

れて叱られましたんや。 で、府廳まで路郎が呼び出さ あった筈 煙たちたつなにわの街で

葭乃=それから 轉業や僕は一個の部分品

ましたな。

栞=然し割によく見付けより

葭乃=兵隊が喰べることばつ ますね。 なども叱られましたなア。 小松園=これはなんで叱られ 第一便、二便もバナ、食

うのでしよう。 却つて苦しんでいた人もあり こんな句もおましたで…。 ますよ。 小松園=兵隊は内地にいてゝ け貰い 猫今日もお粥のしづくだ

すな。 栞=此の頃の駐留軍のようで な人もあるし…。 路郎=反対に写真機を提げ て、支那を写して廻つたよう

て、こんな句があつたが、コ レも時事吟だね。 これやこの行くも歸るも

米をさげ (水車)

腹に巻く米は冷いものと

らまだ分るが、そのうちに分 停電の句など多かったです らなくなりますよ。米の句、 小松園=米が冷いことも今な

と云うような句もありました 停電も予算に入れた夕御飯

> 摩天郎=いや恩給は六十才に もらわねばなりませんね。

ならねば、貰えないようにな

葭乃=誰の句であつたか忘れ

年が壽命が延びて六十年にな

つたのですから、少し変えて

と云う米の句もありますな。 我々が今食ふ米へ閣議也 (路郎)

は平均三、四年だ。

小松園=山雨楼氏の

日本の表情タブロイド版

あれで恩給貰う人は皆損して スクプランと云う所ですな。 俸でした。下情に通じんとデ で、百円以上の者は皆一割減 ますな。これは浜口内閣の時 と云う句が先生の句集にあり 絹夜具の中で減俸案生れ 路郎=いや、物資が欠乏して これはコンニャクの配給があ

生き舌も生き(久留美) 斯うなればコンニヤクも

から見れば太平だつたんです

人と行かぬ人とはつきり限定

小松園=徳川の三百年は庶民

いと分りませんな。

栞 = 外国にも恩給はあります

路郎=日本の制度の大学は洋 よ。日本のは外国の模倣です 摩天郎=英国にもあります

> 今ではジャガ薯に甘味など感 はジャが藝も甘く感じたが、

英=独法がおもですか。 行しては一寸づゝ持つて帰つ たものだ。

に入れたらおいしいですよ。

小松園=コンニャクはすき焼

路郎=いや、そのすき焼が出

来きん頃の句や。

栞=いや、あれは川柳だよ。

路郎=いや古くは聖徳太子の から生れたものだね。 十七條憲法と云うのがあつ こんなものは支那の思想 すな。

と云われてますね。人生五十 すか。そうですか。恩給亡国 栞=恩給は外国にもあるので 資不足の頃だつたからね。そ 路郎=あの章を書いたのが物 る所以さ。 の点が所謂時事吟の時事吟た

なの記憶に残るのも太平の御 ありませんか。 世ではないですよ。 小松園=一寸した事件がみん

当時の新聞の事を知つていな つていますよ。そして貰うの たが、川柳にも隨分詠まれて 代に、赤穂義士の事件が惹起 路郎 = 元祿のケンランたる時 云つていゝだろう。尤もズツ した。それが芝居にまでなつ と後になると詠史川柳のワク いる。あれなども、時事吟と

きていた七十年間は、相当に 路郎=部分的には太平だつた 某=元禄時代でしたか 物騒な時代であつたからね。 と云えないね。初代川柳の生

つてますな。 小松園=一茶の句は川柳が りますね。 と云う談林派の人の俳句があ 何事ぞ花見る人の長刀 カン

の時事吟はみないじましいで 小松園=「新川柳講座」の中

に這入るが。

味のない物にでも味が出て来

来たからコンニャクのような

たと云うんだよ。実際あの頃

つたと云うわけですか。

が、今なら川柳だ。山口誓子 さんも川柳に近いですね。云 茶は俳句として作つている

葭乃=太平の御世の時事吟は ていたにすぎない。 路郎=それは少し大雑把な云 つてる事は穿ちだ。 ですよ。多分に川柳味を持つ い方だな。一茶は矢張り俳人

りますね。 は感心しませんね。川柳に限 小松園=時事を詠むと俳句で

人寄れば何の配給かと覗

ですな。

葭乃=マージャン屋はすたれ 屋は割にすたれませんな。 チンコ屋かと覗き」パチン 小松園=然しパチンコは行く ましたな。 小松園=今なら「人寄ればパ

最近の時事吟についてお願い 春集=古い時事吟をやめて、 栞=あんた行きますか。 されましたね。 路郎=自動車の運轉手が殺さ 小松園=半年に一回位。 します。

れた時に詠んだ私の 顕あらば化けて出てやれ

な。 これなどは最近の時事吟だ 豆秋君の句はよく時事に

小松園 触れているね。

君の名は女女の味方する 遊星)

うなもので、いつでもこんな なるね。「愛染かつら」のよ 栞=これも時が経つと駄目に のはあるから…。

たが、あれは眞知子卷の元祖 はやるね。 小松園=田舎には眞知子卷が 葭乃=昔はお高祖頭巾があつ

ら耳が寒いのでかぶつたの かぶる必要はない。 で、大阪ではあんなに耳まで 路郎=眞知子卷も北海道だか

ぐためで、顔をかくすのが目 路郎=眞知子卷は寒さをふせ 小松園=女は顔を見せぬため ツクなども女は顔を見せない 大てい宗教的関係で、カソリ 的ではない。顔をかくすのは にするのではないのですか。

すな。 栞―喪服を着ると、 対照されて額が美しく見えま 黒い色と

路郎=私が、 うのがありませんね。 を一つ出して下さい。 小松園=ハッキリした時事吟 英 = 時事吟のうまい柳人と云 その昔「大正日

「ヨーヨー」とかその当時の

路郎=釈勲斉氏は、

本人は俳

人の夫があつた悲劇を知つて

うまかつた。時事吟の作家に ころには木村半文錢のような 日」で時事吟の選をしていた 流の作家か投句していたか 一應技巧の修練が必要だと なかしいう句があつた 殊に半文銭君は時事吟は

思うね。

ものだ。 で時事吟は大衆小説見たいな いるが、文学的には價値の低 吟になっている場合は別だが くないね。それが自然に時事 時事吟を作る事は取り上げた 路郎=僕は川柳人の立場から いから敬遠するんだな。 出ないのは時事吟は生命が短 ムに時事川柳が取上げられて 小園松=時事吟のいゝ作家が ……。近ごろはジャーナリズ 句が多いからね。川柳の中

柳を知らぬ人にも… 葉=向う受けがしますね。川

ト及びその妻と「アカハタ」 情に反し天皇と皇后をヒロヒ 闇に跋扈して、当時の国民感 味が違う。例えば共産党が無 に作らされてるような句とは 弊はあるが、ジャーナリズム 物に感激して作つた句と、 路郎=同じ時事吟でも、 新しい言葉を入れて作つた句

に書いていた時 古くとも僕には仁義禮智

比較的生命の長い句もある。 らない。時事吟と云つても、 こんな句は僕自身では気に入 引くような点も何パーセント 類まれて、どんな句を詠まう ら生命があるが、新聞社から 水府君の句に かは加味しなければならぬ。 品にならない。大衆の興味を は行かぬ、然し僕の本然の姿 ろうとして作つた句でないか ばかりを詠んでいたのでは商 かと思つて詠んだ句は、そう と僕は詠んだが、此の句は作

釣竿がさわるる號の運転

較的長く残つていたが運轉系 号を云う字は見られない。こ 電の車体に運轉系統を示する が何のことか分らぬ。今日市 つたが今日になると、「る号 と云う句があるが、これは当 摩天郎=「アジャパー」とか かれてあるからね。 統の表示が現在では数字で書 れは玉造、築港間の系統で、比 時の時事吟として大変面白か

> 昔「パッパー」と云う言葉が ちやを取り出した。(笑い) 流行つた。 の時分から大人が子供のおも すな。割に面白いもので、あ のは二、三十年も前になりま 小松園=ヨーヨーが流行つた は時事吟ですな。

端」に載つているよ。 を作つている。句集の「大川 路郎=阪大川柳会で、「ョー 栞―一時「カーン」 と云う言 博士なども「ヨーヨー」の句 どがあつた。亡くなつた長崎 ョー」と云う題で作句したこ

た。 ね。批判以上のものがあつ ど云う意味もあつたのです 慢から来たらしい。 葉もあつたね。あれはのど自 時の大きい事件に対して警告 小松園=古川柳の目的は、当

いものはよいね。 小松園=俳句でも川柳でもよ て妙と云うものであつた。 を書いていられたが、穿ち得 川柳とも俳句ともつかぬもの 栞=釈勲斉氏も天声人語に、 取り上げたわけだよ。 路郎=それで新聞が時事吟を

う意味でね。 川柳で埋めたこともあつた。 当あつた。逆効果を狙つたわ と云う旗の下に集つた人も相 川柳もかくの如く変つたと云 人語の欄全部を「川柳雜誌」の けで、彼はこんなキャッチフ 談を受けたが「下手よ集れ」 が雑誌を出すと云うので、 ではないと云われていた。 俳人から云つたら大したもの レーズがうまかつたね。天声 句だと云つていたが、一般の

をするのは、普通の選よりも 知らねばならぬし、如何に核 至難だ。何を云うているかも も読まねばならず、自分の興 ば、少くさも五、六種の新聞 心を摑んでいるかと云う事も 味のない記事も読まねばなら 新聞に時事吟を詠もうとすれ 中々大変だ。時事吟の選

知らねばならぬ。 たので私は 路郎=議員蔵費が値上げされ とは云えませんしねー。 小松園=辛辣必ずしもいゝ

と詠み、引揚げて来た女に二 値上げされ 欧リ合いもせずに歳費は

> を詠んだ。 片付かず 二歩ですと將棋のように

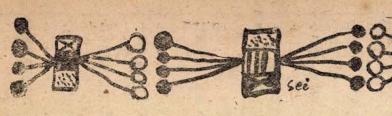
漏電と云えば落度でない 出火頻々の時に、

ところで、それが時事吟のし と云うのも詠んだが、 んしようだろう。 ど巧くつかんでると云う位な なるほ

難うございました。 は分つているのであるから、 春巣=では此のへんで色々有 説明はいらぬですな。 小松園=時事吟は摑んでる所

(客巣雏記







池田市 戶 田 古 方

伊達眼鏡みたいになって置き忘れ 板につかぬ着物もうれし三ケ日

女を殺した前編牛乳をのみながら 郷愁のひとりばつちの風のなか 雑巾のこゝろになつたひとりぼつち 尼崎市 水 谷 鮎

夫婦してローソクの灯をかきたてん 憲法をかえる気いくさいとわぬ気 硝子戸の中で一生を送らんか ホノル、市 內 藤草 Ш

横浜市

福

田

楼

あんなのは美人じやないと振られて居 父帰る老と病を手土産に

米子市

三鴨

美

笑

この荒れを客はうれしいことにして 唇の濃さ子供も二人あり 園長は幼兒の頭腦をふと正視 布施市 田 水

店員もトゲトゲとして十二月 十二月マッチの軸が折れるなり 十二月今来たようにあわてたり

老いらくの暴力女給にひつかゝり

鳥取市

西

八

スピードが好きなら早く死ねばよし 重役も小唄も板についてくる

萩松江人も雀もふところ手 萩市にて

君達は麦でよい(一予算たて

間髪を入れず火種をもろうてき 気を引いて見て今更に後悔し 友達が乗つて地声のエレベーター 朗らかな一家ですとは自畫自養 エレベーターひとり乗つてゝ照れくさし

美

六十と聞いて艶聞面白し 毒づいてゐるのも惚れているからだ 退職金カメラも一つ欲しくなり 一束になつて斬られたエキストラ

郎

指輪またかえて出かける未亡人

大阪市

尾

潮

花

佛壇へ坐るは養子だけになり 師匠もう医薬のなかのひとになり 名取りしてからは縁談から離れ

高血圧には同情のある社長 べんちやらに云う洗濯機妻のらず 君もかと気胸で会うて悪びれず

大阪市

III

春

車

下関市 Ш 不 水

步 パンしは冷い錦着て帰り 飛んで灯に入るとは知らぬ家出の娘 隙のないおんなへ酒の燗がさめ

庶民等へ貧乏神の速いこと 厚着した年増の愚痴を三分きゝ

大阪市 正 本 水 客 声だけのおどしにのらぬ印度蠅 爪彈きは切ない意地を当てこすり 猛るとも所詮は蟹の爪なりき 小論しも老妻なれや酒のこと 敏腕家やらいでもいゝ事をやり 手負うともワンマンと言う御腕前

カルカツタにて

お悔みの下駄の多さにハッとする 池田市 紫 香

見学の子が冷汗をかゝせに来 人通りをじつと見て居る窓に住 消防のはつびを着れば気が替り 岡山県 浜 田 久

米

雄

宴会をにげて喫茶へ来る若さ 降りる客親切そうに座をゆずり 妻が買う金を拂いについて行き 岡山県 逸 見 灯 竿

大阪市

林

巢 父は飲み家出の母は美しゝ 咳しても嫌つて逃げる子も居らず 体温計を打振るエネルギーもなく これだけは書いてくれなと名家の出 バイブルを手にして愛の影もなく 大物はストで儲けた味も知り



鷄を飼う小さな然を捨てられず 耳掃除させつゝ夫寝るつもり

岡山県

大森

風

来

子

君の名はと聞けばまち子とぬかしたり

大阪市 福 田 妄 夢

家庭教師親へも聞かす聲を出し

貰う人貢ぐ人あり仲居無事

人妻の五円を値切る流し目か

尼崎市

小

林

文

月

義理欠けば儲けていると云われける 〃生命みじかし〃――千円位で殺された

増給の誰が何程あがろうと

絲之助 大阪市 渡

辺

孫

抽

二男紐落しに

焚火盛ん神様どうやら御留守らし 大阪市

富

岡

淡

舟

委員長の後についかぬものばかり 修理工齢も判らぬほど汚れ

下関市

髪いつか伸ばして父を煙たがり 深酒へ母上妻の肩を持ち 電話口課長案外恐妻家

鳥取市 杉 谷 湖 山

貸しのある小さき優越感を持つ 数の子を囓む音冴えて春たのし

宇部市 国 弘 4 休

酒の座は親父おや爺と親しまれ かつぎ屋におじぎされてる親しさよ

小 西 無 鬼

金策と知つてか火鉢火もくれず

岡山県

直 原

七

面

山

背廣着る初の写真を撮つてやり

管理者になれば思想がすぐ変り バルコニーから見下す気社長持ち 京都市

子供の卒業を迎う

鶴 喜

由

別府恋し旅費の高さがまっならず 握れば握り返しただけの老夫婦 卒業が近くよう吞む子に育ち 仕切り直しに元日の土を踏

退 職

出雲市

尼

弘 津 慶 啄木と同郷下手な詩を創り

奥さんの自慢の料理にもあいて 故郷はいゝなあ磯の香を吸い込んで

尻馬に乗つて気焰はあげたけど 大阪市 飯 降

白

香

人生意気に感じたなんて昔です

山口県 野 井 蛙

馬の脚報われぬ汗拭く樂屋 悪酒と知り一人逃げ二人逃げ

音絶えて月に寝る町僕の町 行く先は言わず出て来た大晦日

ライバルの笑い方まで気にくわず 長病みを今日は蠅まで馬鹿にして 二日酔妻の希望を入れてやり

新聞は餅の食い方まで教え

女房の然の深さにフトあわて 四十二子の無い妻のあどけなく

大阪市 西

森

花

村

すばつこな嫁に年寄冷や(し

税務署の隣え新築してこまし

病弱の孫に長生き切ながり 鳥取市 河

村

H

滿

三度目の酔元日も皆れかゝり 繪でカルタ取る兒と春の留守居する かけまくも足投げ出した兒を拂い

麦喰つて一年越す気麦を踏み 二重橋命拾ひをして帰り 兵庫県 家

沢

涔

花

寐正月やつばり女寐て居れず 逆コース社説の種を又つくり

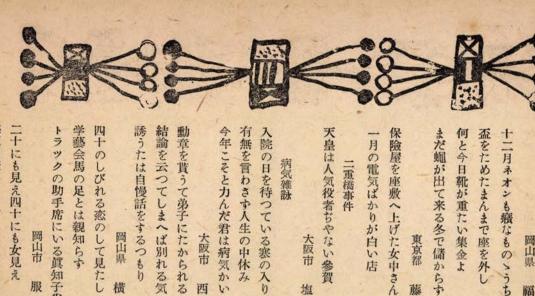
勅題が一字で足りる世と変り 声援に退くに退かれぬ老力士

東京都 藤 本 滿

親切の隣りに幸福坐つて居 富士を見て年始滿足して帰り おしるこをけろりと食べてコンパクト

山出しへこうも都会の人の波 三男の空気銃など撃てる幸ち 熊本県 西 П 如 III

高知県 姬 田 夕



温泉の街に来て湯に入らず吞み明し 除夜の鐘聽いているのに取りに来る

岡山県

島

南天を一本植えて庭と言う

是非論は別郷愁の湧く軍歌

>三ヶ日悪友ばかり訪ねて来 薄化粧すれば猫まで嬉しそう

鉄 兒

ゼスチャーで出した辞表が受取られ

岡山県 大森 娛 何 樂

腹下し乍らも受ける松の内 真直ぐに帰れとボーナス日の女將

尼崎市 長 谷川三司

貸さぬ気のキッチリ坐る膝がしら

東京都

視線また伏字の前へ道もどり

一重橋事件

盛り場へ白衣心臓强くなり

大阪市

塩

浜

頭下げ損うたのが崇り 借金は僕もしている大ジョッキ

路 高知市 大

西

迷

飯台の上から坊やを手渡され 唯歩くのが好き恋人居なくとも

b を お元日酌するワイフの不器用さ 延

岡山市

永

忠

大阪市

西

三ケ日もう働いてゐる生活 上手すぎる母は読み手にばかりされ 下関市

四十のしびれる恋のして見たし 岡山県 横 步 空想へ風速計がよく廻り かんざしと共に八年待ちました

トラックの助手席にいる眞知子卷き 平 バラまいた金あほらしい二日酔

海底の様にキャバレー照らされる 二十にも見え四十にも女見え 岡山市 服 部 + 九

> 阪 田 良

初荷ひく馬のひずめの音がよし 下関市 石 Ш 侃

流

洞

だらしない人へパチンコよく遺入り 岡山県

苑

女

スクーター買うぐらいに狭い村

擦まれながら按摩に国をきいて見る モデルにでもなれとひらけたお婆ちやん 男装に憧れた娘が嫁きおくれ 人寐て居れば地震の夢もみて 広島県 大阪市 安 Щ 岡 田

珊

枝

郎

季

橙

熊本県 有 働 芳 仙 地方版僕の句もある日曜日 貯金とは著らぬ物で一家無事

婦人雜誌女房に要らん知慧をつけ 恋知つて母に逆う日もありぬ 岡山県 水 田 Ŧ

石

窓 風邪一つ引かぬ子供で落第し

ニセ物の軸を見てると酌いで吳れ 大阪市 Щ 本 光

美 辛辣な批判ゆつくり喋り出し 愚劣だと思えど金の強い事 母の気になつて本妻暮すなり

倉敷市 木 村 干 容

坊川柳の素材にしたと妻ふくれ たましの夫婦喧嘩に巻きこまれ 鷄頭となつてあたりを睥睨

サンドマンへ婦警笑いたいのをこらえ 上品な掃除婦特攻隊の母 キャバレーを知らぬ夫にくたびれる 倉敷市 田 垣 方 大

チンドン屋今日元日は生地のまる 料理法雑誌の智慧はすぐ生れ

予算案飲み代と云う項もなく

岡山県

中

仙

石川県 村 味

もう一度勅任官の夢があり

逢引の積れば女拗ねかゝり

岡山県

坂

井

Ξ

棐

市 八木 麽 天 郎

珠数持つてするパチンコの高野山

KKはエレベーターの横にあり

大ビルにて

田 T

失業を悠々自適らしく見せ 故郷を片手で拜む三度笠

股旅劇を観

目に触れるものみな二女の匂いして 逝つた子の話ばかりで餅が焼け

倉敷市

水

谷

谷

水

あつさりと別れた二号貯めて居た 女將さんの小じわ見つけて叱られる 倉敷市 椙 原

儲かつてくれば旦那が邪魔になる 岡山県 田 村

藤

波

そば杖をくうて荷物を調べられ 米の飯法網潜つた顔でなし

口喧嘩つのりて炬燵の高あたり 喰べ残し食べて骨肉だとわかり 岡山県 岡 田

夜

平

話しても吳れない方が美人なり 警察と判つて電話あらたまり

終バスが今出たとこへ振られて来 年ぢやげな云われて少し意地になり 岡山県 岡

然がないと里の母親歯痒ゆがり 岡山県 本

田

惠

朗

倉吉市

日

置

文

鄉

路

この雪へ碁仇夜討のように来る 新しい白紙に向うような元旦 求愛の小道具らしいオルゴール

降服はせず服從はすると決め 大阪市

痛快さ風邪引いてゐた高利貸

無縁佛それなりけりの一心寺

善

吞むのんかそうかとだけの実家の父 嫁くべきかたのみの彼にや金がなく

眼鏡まで娘の方が度が强く 病気の巢みたいな彼がまだ死なか 夜なべする針もつめたきものいうち

潮 蛋白て何やと菜食民族の 鞍替えの妓が芽柳を見つめる灯

大阪市 田 六 電

子

坊 モーニング不思議な御総へ借りられる 豊中市 上 ゆ ず

る

女教師の片恋あつさり轉任し けちんぼへ蔵暮がピンとひょくなり

眼鏡越し結局眼鏡はずすなり 寝正月部屋の廣さを持て余し

とりまきがそろく一欲しい地位におり 鳥取市 森 本法 泉

子

4

子を置いて出た買物が割烹着 年の潮の景に母子寮撮される

どうせそうですよと反省してるなり 囲うことも親に負けない御曹子 そんなことあれが云つたか類母しい

瓢 炭焼けば我が子我が妻つゝがなし 君の噂してた所とおだてとき 職業婦人などと云われて子を育て

君のラケット六甲へこだません

女事務酔つて帰つて驚かせ

水

おばはんと呼んで妓に嫌われる 大阪市 佐 白

女教師の夫となつて気をつかい 長生きがボチート店の邪魔になり ニコョンの焚火けむたいまゝあたり 老らくの恋マフラーが派手になり 大阪府 小 池 L U お

兵庫県

內 圭 Ξ

アマカメラ新春の街を止めて居る

野暮と見て妓もてなしぶりを変え

三十才と言うに女のくどいこと 汚職とはよもや言うまい受けて置き

大阪市

H

賀

峰

懐炉まで入れて重役飲みにゆき

大阪市

山

崎

帆

加

夫

税務署の窓口强い娘に育て

高

崎

声

かつぎ屋に荷物の番を頼まれる 師走々々みんなあわてるからあわて

ナフタリン臭い晴着におじぎされ

潮時々々首相大いに考えよ 奥さんが病んでいるらし門のごみ ベン取れば肚とは違う事もかき

泥棒も何か拜んでから出掛け

成績はどうあろうとも顔で嫁き

こゝだけの話だと弁士の控室

倉敷市

村

萬

古

無條件には拜めないアプレ型

倉敷市

井

春

H

本宅で死ねて美徳を称えられ

岡山県 枝 策

旅は良しこんなへんびに友が生き 金で済む事だ総花付けてやろ

酒が出るなと感じたか腰をすえ 大阪市 文

夫

字の遊戯に陥つている

詠むと云うよりも、文

分の人生観や社会観を

誘惑に負けたを悔いる絹ぶとん

大阪市 吾

玲

人

酒の度が過ぎる秀才惜しまれる 花嫁の眼に伊勢海老のグロテスク 鄉

初風呂で去年のまゝの髭をそり ナホトカの想ひ出語る酒になり

お玉杓子我子かいなと蛙が見

岡山県

岡

本黨

無 暴 風 政

子メ

サーカスの小屋へ時雨が一しきり 雪国の娘の好きな旅役者

デパートの品はこちらで入れてます 丼池は人に言うなと言つて負け 丼池の今度は土佐の客へ向き 丼池は着ている上衣脱いで見 申し合せ」守つていては喰えません 丼池五句

就職へ畑違いなど言うとれず 思い出の宿思い出の置炬燵 酌ぐ妓俺には義理と云う手つき

岡山県

津

田

麦

太

楼

櫻炭二号に惜し気なくつがれ ツギ屋も乗らず無事故の山の駅

岡山県

岡

田

青

果

対しても同様である。 ら、よく検討して欲し おく方法にしている。 るが、近ごろは拙い句 をいかにのばすかと云 相当古い作家で、なぜ いのである。この事は から次には叙法の上か て見て、まず詩想の上 方は没になった句と、 であろうかと思われる い句は黙つて没にして や、その作家の畑でな どむちうつたものであ 昔の私はその作者をの 払つているのである。 柳歴の相当古い作家に 抜かれた句とを比較し にむごく没にされるの ばすためには苛酷なほ うことに就いて苦心を だから、なぜこんな

り返えしている。私は を数十句寄せて来たが 最近、赤棒を詠んだ句 が、容易に気付かな 歯掻ゆくて仕方がない にかかつて、それを繰 い。私は相変らずピシ く没にしている。 岡山県のある作家が 抽象的な女字の魔術

くつつけたのに過ぎな 元的と云う言葉がある かつたからである。俳 面へ赤棒と云う文字を 私は一句も採らなかつ た。それはいろんな場

1

句でなくて私の句にな である。あまりに手を ないことにしているの 以上は殆んど手を入れ ぐらいはするが、それ 否、技巧の優劣等に就 つてしまうからであ 入れすぎると、作者の してもらいたい。私と ても、よくく一研究を してはテニオハの訂正 句の構成上の良

い作家は、詩想につい たい。比較的柳歴の浅 ついて三思してもらい 上の技巧よりも詩想に こんなに没になったの た句と比較して自分の て没になった句と抜け かと思われる方は表現

米子市

抵当の田圃も同じ雪が積み 裏白がかさこそ乾く三ケ日 質草を抱いた女房の薄い肩

俵轉がして百姓の三ツ揃い

西 雄

ボマードは二年前のがある詩人

ぐるりからあたり炬燵で風邪を引き

もないが、用語の適不 行くべき道を知らねば

ならぬことは云うまで

ては考えなくてはなら

(XI

東

い酒 あんたはんも川柳それでうま

たくこれにつきた。 がつぶれる。大阪の一ときはまつ ている、これで不足を言つたら眼 んや手にするは、好物の葷香とき んにたとえたらよいだろう。いわ える、この倖せこの歓びは一体な にして、お互い心おきなく語り合 ことも話したこともない相手を前 からだ。生れてからこの方、見た 意味は変らない。趣味で結ばれ合 があるが、何年経つてもこの句の という句を二昔も前に作つたこと った人間の心ほど温いものはない

り若い気分にさせられ、酔いも手 四十を出たばかりの私だがすつか 三ケタも上のおれき~ばかり、 内なんてことも柳人らしく気がき る。その手の下にあるのが、幕の 伝つてい」気なおしやべりであ 氏ら川雑直参の旗本連、年輩句 庵、春巣、文蝶、摩天郎、いわを、栞 席をすませ表へ出たら、 ている。かくて心嬉しく愉快な 集るは路郎総帥をはじめ生々 からいつても私より二ケタも その辺

えて、さすが大阪と、顔でもなで までがサービスの一端のように思 は会場までがなんとセイセイ庵だ たい気げんに、ふいとうかんだの ている。こうなると場所、ところ に待つているのが心斉橋すじとき 散歩下さいというように、眼の先 がサンキュー橋、その上どうぞご 様、大変有難らございました。 た。とにかく当日ご出席の皆

早速私の横に腰を下ろされて、手 ぎした。挨拶もそこそこ、先生は 随つてその先生が梨里さんとお二 ら人か」と小さくなつてあかずそ こから「は」あ、これが路郎とい けは拝見している。勿論そのとき 年前、大阪島の内の句会でお顔だ つてよかつた。左様今から十五六 にした包みを開かれる。先生五十 のには、恐縮を通り越してどぎま 人で、わざわざ出迎えて下さつた お姿を眺めていたものである。 単なる一参会者にすぎず、隅つ 路郎先生とは全くの初対面とい いになつてしまつた。

年の句叢擬つてなる「旅人」だ。 開いて示される先生のその横 頁一枚ずつ、私の前にその句集 夕は実に愉快じやつた」

まつていたのだつた。 顔、その声ののびやかにも明るい にみるみるうちに押し包まれてし かさ、私は正直なところ返す言 何かこう捉え難い感動

路郎先生だけには胸の底までつか 相手に感激なぞはしない質だが、 北極星という文明開化の牛鍋屋み 私の気心が手放しだつた故だろう ら故がなせる業かそれとも商売気 礼だが、これは世にいうウマの合 まれてしまった形だ。先生には失 つきしだらしがなくて、 離れてフランクに旅にあるという い一やつたときなぞは、もらから たいなところで、先生とさしでば か、とにかくそんなことは論外。 は天皇から大臣、下は強窃盗殺 てきている故か、滅多に初対面の 人犯まで、種々雑多な人間に逢つ 私という人間は職業柄上 友達みた

あたりを染めて、先生青年のよう ものだ。 しまつて、三時間近くもネバつた 夢、いつか時間のたつのも忘れて は難しいお人ですね」 に、あの話この話、懐過語未来の ど」といった調子。ぼうと頻骨の どうも大阪むきじやないョー 「ところで、先生貴方という人 「あ」、とつ」きも悪くてね、 「ハ、、、まあ、も一ついか

というところで、南海の改札口で 肝タン相てらすというか、 本

きわたつていた。池田の叔母御に が祝福するように、さんらんと輝 先生とお別れしたが、独りになつ て電車通りに出ると、ネオンまで 砂代しようか、それともタフに旅

とは、およそ不似合な今宮だ。二 えば、林譲治にあったつけ、考え らんたる満艦飾のこの橋の上の灯 想い出がある。その場所は、さん **我橋に来ていた。この橋に立てば** とりとめもなく考えながらいつか るのが耳に来た、はて自由党とい 足を心斉橋筋にとると、ニュース 合の旅の第一夜をふらふらと私は 館にでもしけこもうか、そんな具 た。没食子さんといえば…などと てみるとそれは没食子さんだつ が、自由党総務会ではといつてい

くと、彼女は夕方になると、紅な 介抱をらけた。よくなつて気がつ けている。いつもお白粉が臭つて で、五日間は高熱に悩まされた。 がすりの単衣一枚で震えていた。 ム街の安宿三河屋というので、紺 十何年か前のこと。私はこのスラ に、病中私はこの女の親身に近い いた。何者であるか判らぬま」 いて、白いしかん巻を首にまいて に元結で束ねて、青い鹿の子をつ どつけてそつと出て行く。安酒場 一人の中年の女だつた。髪を古風 身体をこわして転り込んだ恰好 泊相部屋で十五銭、その相手は

上をゴーと夜行の名古屋行が通じつとらずくまつていると、頭の 私は雨しずくのなかでわけもなく と女がしみじみという。ある、 その土手下の暗がりで、女と二人 えに出かける。客もなくシケた、 だつた。これが美人で才たけてい いて、昼見ると悲しいほどの醜貌 らい上、片方の眼にホシが入つて といつてたが、それよりは五つく 空つ風のつよい日。彼女は二十六 の朝、かき舟の横腹が寒々とした しきし。 こつくりとうなづく、哀しいその れに乗つて旅をしたいわ ばかりが乗つているような気が 窓々は明るく、そこには倖せな人 る。見上げるとその流れる汽車の をかくえて、その仕事場へ私は迎雨の降る夜など、宿の破れ番傘 のなかで当時の夜鷹、今でいらべ はその傍らのガラス工場の板囲 ン助稼業に入るというわけだ。 この女と別れたのが、この我橋 「曹生さん、一度でい」からあ

た、土手下の暗がりだつた。仕事ことに暖かだつた。 か屋台店の女だろうと考えたら、 その職場は今宮のガードを切れ た。ともあれ大阪の灯はこの日ま 日の夕方四国通いの船の三等室 ライオンハミガキの二袋が、その つた、それつきり。別れに貰つた のま」スターへと浜筋に下りてい かねさん」とだけたど答えて、 ねない。事実私は〃君の名は〃と たら「君の名は」大阪篇となりか て、私の膝へ白く切なくこぼ いくどもきいたが、通り名の「お そ

麻 生

郎

(田田)

詠んだのである。 ばかりである。そこを作者は から取り残されたような人物 何れも風采のあがらぬ世の中 がズラリとならんでいるが、 と、石の鳥居の近くに経木書 「よくも落武者揃えたり」と 經木書よくも落武者揃え お彼岸に天王寺へ参詣する

く云い放つた表現技巧にある に、「落武者揃えたり」と强 狩り集めて来たのでもないの に貧弱な風采をした落伍者を のだ。この句の面白味は、 の中と云うものは不思議なも くらか稼げるのであるから世 ているのも居る。それでもい と思うと、当て字ばかり書い なか達筆なのもいる。そうか 風采こそあがらぬが、なか

描かれている。 廻している情景がありくと ら、あたりをキョロく、見 ら首を出しての会話である。 泥棒が遁げたらしいその窓か からね。」 ですかし 外に逃げた形跡はありません 「エ、ツ、ここから逃げたん 「多分ここですよ。ここしか もうあとの祭ではあるが、 賊が逃げたと思われる窓か 泥棒の遁げた窓から首を (小松園)

たたえたい。 くキャッチしている軽妙さを 現で社会事象の一コマをうま の人であろう。これだけの表 人物はこの家の主人と警察

シグナルは青だそれ行け

うはいかない。ウツカリ考え 飛ばされてしまう。 ら、間違いなく自動車にハネ ごとでもしていようものな けたものだが、近ごろではそ 昔は本を読みながらでも步

う句があるが、全くその通り のスケッチであり、穿ちの句 として限に浮んで来る。街路 親の街を横切るさまが、髣髴 子どもを四、五人も連れた母 は御堂筋などは横切れるもの で、スローモーショシの人に こゝにあげた句を読むと、

二人はいるものだ。庶務の隅 どこの役所に行つても一人や 生字引と云われる人間は、 生字引表彰されて元の椅 でも街を横切ると云うことは である。少々馴れているもの 都会の交通量は殖える一方 そうした生字引が表彰され

モーション引つ込んだ」と云 誰かの句に「御堂筋スロー

でもある。

であるが……。 こと役所に関しては、かなり ーのような存在に過きないの る。それは課長のアクセサリ 詳しく知つているものであ にいつもくすぶつているが、 いると思う。

る。 字引の生字引らしいところな 元の椅子にいるところが、生 椅子も彼を待つてはいない である。係長の椅子も課長の 五が、この句を生かしてい のである。「元の椅子」の下 別に不平そうな顔もせずに、 のである。しかし、それでも ても矢張り元の椅子にいるの 云うのであろうが、表彰され たと云えば多分何十年勤續と

でである。イヤーリング、そ しさが、この句にはよく出て こまではしないが若い人妻ら ので、つい着る気になったま てよ、素適だわ」と云われた けど、「あんたによく似合つ 別に中華にいた訳ではない だ若し(美笑) 支那服を着て出る要はま

も明るくて朗らかな句であ 夫の心境が、この句から感じ 妻の持つエキゾティックな美 とられるではないか。いかに ムリに止してくれとも云わぬ も、まんざらでもないので、 かなアと思わぬでもないが、 ウチのやつ、どうかしたの

この一句にまとめられてい る。斯う云つた情景が巧みに と妻も、子も思いは同じであ て下さらないものかな。」 うけれど、…もう少しひかえ まらんですよ。」 れにしても、あんなに召し上 イからなんだろうけれど、そ とか云つてるくせになア」 あがつてるよ。血圧がどうだ 無理はないよ。だいぶ酒量が だにさわると思うわ。」 あんなに召し上つては、 つてはね。」 「近ごろ、お仕事の方がエラ 「おッ母さんが心配するのも 「幾らお好きなお酒でもね。 「真逆、そんなことはなかろ 「脳溢血なんかやられてはた 要も子も酒量のふえたの

る。作者の実感から生れたの かも知れない。

新課長机の位置を變えた

も触れなかつた。と云うので た。そして仕事のことには何 ゝように机の位置を変えさせ 人に命じて自分の手勝手のい えた。それから部下の二、三 が、先づ自分の机の位置を変 人か出来ない人か判らない 新しい課長が来た。出来る

哲もないようであるが、こん 者がいかに静かにものを観て などその一つだと云える。作 は確だ。穿ちと云うものは人 な課長がザラに存在すること ある。これだけではなんの変 いるかが判るであろう。 つているものである。この句 の気づかないところにころが

代表に押されて妻に叱ら (五〇)

いの。Aさんでも、Bさんで も、いくらも人があるじやな 表なんかを引きうけなくて うにことわれんじやないか ば、そう木で鼻をくくつたよ ってくれよと頼まれて見れ た。何もあんたが、そんな代 があるんだ。頼むから一つや うぬぼれが强いのね、あん この代表は君でなくて、 だものらしい。

レジスタンスでこの句を詠ん

作者はそうした人に対する

よ。お人よしもいゝ加減にし げてしまつたのだし 吳れと云つてサッサと引き揚 と云うし、Bは妻クンが里へ て頂戴ッ」と云うところか。 で、是非一つ君が引きうけて 帰つているので、早く帰つて 留守番をしなきやアならんの が痛いからかんべんしてくれ 「それがさ。Aは今日あたま 「一つ間違つたらクビです

> 多いのである。 な人に限つて、案外握り屋が ないのである。しかし、そん うだけ云わしておくより手が 金がある人だと云うのであ どうすることも出来ない。云 も、金がものをいう世間では る。人間にはたしかにそんな な声で、あけすけに口をきく 一面がある。癪にさわって 人がある。こんな人はキット 誰に遠慮会釈もなく、大き あけすけにものを云うの

「デモだいぶまわっている 「ごきげんだね」 と云う訳でもないのだ」 ある幹部とか 醉はなくちやならぬ日も (方 正)

みたくなくても否まなくつち と云うものは弱いもんだ。否 やならない日もあるさし かも知れんが、 つてるかも知れん。酔つてる 「そんな日があるのかな」 「そ、そりやあ、いささか酔 方のお客様と来たら、幹部 あるとも、あるとも、仕事 酔わなくツち

> だと思う。 と、まあ斯う云つた生活者の 判つたかい。」 や話はまとまらないのだ。 やダメなんだ。先ず酔つばら やダメなんだ。酔わなくつち キッス位やつてのけなくつち つて首ツ玉へかじりついて、 一面を巧みにつかんでいる句

三百六十五日を働き抜いて お元日ばかりは小原の庄

とが出来るのである。 とが、「お元日ばかりは」の いと云う一つの欲望であるこ らしたのではなく、暮らした の庄助さんのように元日を暮 を読んだ直後の感じは、小原 ていて面白いと思う。この句 な気持が、そのまま句に流れ 九音字でありながら少し調子句の構成が九音四音六音の十 ように朝寝、朝酒、朝湯でと 「ばかりは」からうなづくこ るとも云えるし、作者の瓢逸 ユーモラスな感じを出してい が軽い。が然しその軽さが 云う夢を詠んだ句であろう。 ばかりは、小原の庄助さんの 迎えた元日だ。せめて、元日

五四

家 投

へ句壇開

新 棚

発行所

もすね 山にされる胡瓜のどれ 一芳

けに、どれを見ても、すねて る品なのである。そんな品が でないことは、いずれは八百 屋の店先で一山幾らで賣られ あまり出来栄えのいゝ胡瓜

誰が忘れ

1:

0

P 3

扇が置き忘れてあ あとかたづけをしてり

ろを持つているからである。 るのである。 單なる写生句でないことは 間も一山扱いにされるような 人法による諷刺句である。人 と云うのである。この句は擬 人間は、どつかにすねたとこ いて満足な形をしてはいない 「すね」の二字が表わしてい

会がハネタ。 いてみ ハテ誰の忘れものかと煽 鐘)

(五五) ある。 3 る。 まく捉えている。軽味の句で 寸煽いで見ると云うのが、こ く印刷ものである。それで一 見ると、栖風の画である。栖 と取り上げる。サッと開 の句のいのちである。実にう 鳳は栖鳳でも、云うまでもな 「ハテ、 いると、 行つた。

みんな帰つて

て」は「…大金持たされて」 の誤植なので訂正。 「腹工合わるし大金持にされ 前号本欄の〔三一〕の句、

麻 生 路 郎 選 評

村川源之助裝幀

定A5

二四四円

一一八九人作家集 総句数二二四七句

一読を請う。
一読を請う。
一読を請う。
一読を請う。
一読を請う。
一読を請う。
一読を請う。
一読を請う。
一読を請う。

獨山市東中山下四〇景地

Ш 陽 K出 K版

大阪市住吉局區內方代西五丁目二五 柳 誌

取次御注文は

社

川柳不朽洞会副理事長として不断 日午前一時三十分に、京都市左京 松良治郎氏が肺臓癌のため二月五 の努力を続けていられた夢裡・村 眠されたことは寔に痛惜に堪えな 区浄土寺真如町四番地の自宅で永 い。享年六十一歳。 ▼川柳雑誌社京都支部長として、

くしていたが幼時のことは何一つ 卷六月号の川柳家の戸籍調べによ かされていたが「川柳雑誌」第十 が、私は養子ですと云うことは度 聞いたことがないので判らない 三日生れだそうである。多年親し 々聞いた。郷里は静岡ですとも聞 村松夢裡氏は明治二十七年四月

菩提寺に葬られるように令兄(在 先の所在地なのであろう。ここの 吉岡ですと云われていたのは養家 あるから間違いはあるまい。従つ る。戸籍調べは本人の手記なので ると、長野県上伊那郡高遠町とあ 東京都)小野正雄氏からお聞き て郷里は静岡県小笠郡和田岡村字

ある。従つて、全然敵を持たない人 も夢裡さんにはかないませんと云 の謙譲さには尾を巻いていた方で の美徳を具えた人であつた。さき っていたが、筆者なども、夢裡氏 ▼氏は資性温良で、稀に見る謙譲 に物故した同僚の後藤青児氏など

あつた頃、ここで川柳雑誌社御池 頭の下る思いがしたものである。 い人であつた。一昨年頃であつた であると共に、責任感の至つて強 であつた。氏は人に接しては謙譲 開いたものである。 橋支部を担当、階上でよく句会を 本楽器製造株式会社大阪支店が四 は昭和五年九月だそうである。 要職を去つて責任を明らかにされ ために事故が起り、自ら支店長の たなどその高潔な人格には何人も か、勤務先の部下を信用仕過ぎた 橋交叉点一丁南の辻の東北角に 氏が川柳に手をそめられたの

れでもよく、川柳のために力をつ た頃、氏は日本楽器の九州支店長 る。第二次世界大戦が苛烈になつ 人たちが応援的に出席して一時盛 を募り、社外からは川柳雑誌社の くされていた。 ほどには盛んにならなかつた。そ 後一般に虚脱状態だつたので以前 内支部を担当され支店の階上で句 なられたが、ここで又、川雑島之 店は戦禍で焼失)で大阪支店長と つて、島之内へ四ッ橋南の大阪支 談をらけた。その後、九州から民 ないかと、何んかあれば、よく相 いので困つている。何んとかなら なつたが、福岡に移るのに家がな なつたので、筆者の宅に来られ に栄転、福岡に転任されることに んに句会が開催されたものであ てい携して社内に多数の同好の士 ▼故後藤青児、西いわをの両氏と 会を開いたことがあつたが、敗戦 て、自分は福岡に転任することに

> 一月十四日夜無鬼居で開催され 川雑篠山支部句会(兵庫県)は

退かれてからは、日本楽器の姉妹 会社の木管楽器の仕事をされて 一昨年日本楽器の大阪支店長を

望·展·界·柳

吉永町公民館に於て新春川柳大会 県)は一月十七日午後六時岡山県

を開催▼川雑篠山支部(兵庫県)

柳人グループと共催にて摩天郎居 例会を二月二十五日午後六時堺川

に於て開催▼川雑備前支部(岡山

生活五十年記念句集旅人刊行を祝 合せて出席されたい▼路郎師川柳 バス停前光明寺で開催する万障繰 三日午後六時から下寺町二丁目市 拶、来賓祝詞、路郎師並に刊行会 賀し、同師を囲む出版記念会を 時から三階図書室で開催▼南区医 を上げ懇談盛会裡に散会▼大阪逓 唱等(詳細次号掲載)でメートル 長の謝詞後、宴席、記念撮影万歳三 特別食堂に於て不朽洞会主催の下 六時から粉浜の親和寮で開催以上 南海電鉄川柳会は二月十五日午後 日午後七時半から阿茶居で開催▼ 師会文化部杏林川柳会は二月十六 信病院川柳会は二月二十日午後一 に開催、西尾菜氏の同会代表挨 一月十七日午後六時より阪急ビル 本社では夢裡追悼句会を三月十 は一月廿四日春日神社集会場で新 民館で一月例会開催▼大洲水郷川 ら弓削駅長官舎に於て、第二回町 界の為お喜び申上げる▼弓削川柳 子氏を囲み川雑赤坂支部設立に関 月四日の例会に大森風来子氏を迎 では二月例会を七日山陽旅館に於 春川柳大会を開催▼川雑岡山支部 市)は一月二十一日夜七時水島公 杯獲得句会を開催盛会であった由 社(岡山県)は二月六日午後六時か 月一日を期し発足するとの事、 し委員会を開き協議の結果酸々四 え大介居に於て開催、句会後風来 た。▼赤坂川柳社(岡山県)では二 て開催、知事杯は東岸子氏獲得。 ▼水島公民館川柳の会

津屋北通四ノ二九)で開催され 六時から武部香林居 部句会(大阪市)は三月九日午後 何れも路郎主幹出席▼川雑旋川支 開催▼川雑堺支部(堺市)は二月 田阪急ビル電鉄本社四階会議室で 阪府)は二月十五日午後五時半梅 の三題。▼川雑池田支部句会(大 る。兼題「勤人」「月賦」「早熟」 (東淀川区三

もどされた書類ベターへ判が入り

当の無い收入へしみる秋の風

対が素気無くなつた借が出来

きよとんとしてパチンコヤの前に立ち あけすけにものを云ふのも金があり さとられぬつもり知人の顔をさせ 病薬の目につく日なり咳はげし 抵抗の無い自然さの唇を吸ひ

務取締役となり、京都の真如堂の たが、その後、布施市の某社の常 前から通つていられた。 京都に居を構えられて間もなし

★昨夏、身体に異状があったの 役であつた。 ある。川柳不朽洞会の副理事長と 分と世話をやいてもらったもので の乗務だつたので、なかくの大 に、川雑の京都支部を再興して随 柳友の立場で北川春巣博士に

▼筆者は昨夏大よその状態を春単

(奇蹟があらわれずに、

幽明境 25

る。

診でもらわれたが、京都在住なの

裡

何

抄

たが遂に起たれなかったのであ け、その後、自宅で静養されてい とになり、手術をうけられたが、 で京大の附属病院に入院されるこ 衰弱のからだで二回目の手術をう すら快癒を祈つていたが、 とになりましたとのことに、ひた と、それのみを会う度に繰り返え すて、充分に加養してもらいたい いので、ただしすべての仕事を した。京大入院して手術をするこ

間的な気休めを云う気にもなれな になられても困るし、と云つて世 人考えを夢裡氏に話して、神経的 博士から聞いて、容易ならぬ病状 であることを察知したが、私の素 氏の作品の一部を採録して、 残念に思う。 を異にされたことは返えすんでも

風格を偲ぶこととする。 ▼次に「川柳雑誌」に発表された

自惚れへ淋しい気持ちだけ残り 金つまりどすえぶつつり御越しなし 落伍したみじめさよろしの夏の服 オ ものにするつもりがにぶいうけこたへ 堰きつた様老らくの是非がなし たまさかを女將の機嫌までたずね 直立の姿勢の儘で嘘をつき つゝましく見て見ぬふりもむづかしく ルゴール静かに鳴つて薄化粧

秋さらば大大阪に暇乞い 大阪より京都へ移向

儲かると云へば近所は目をみはり

しもぶくれの頰感傷の春となり

近道の行手遮る蠅の群

商賣が下手と云はれてまけて行き 物干しの蹴出しの色の淫らなる 思ひ遣り過ぎて迷惑がられてる 疎とい事あれでも困る十八九 御役人係りが違ひ横を向き

欠勤に判つたうそをついでやり

言へない事を言つて吳れたで別れる気

生きる身の情無いのが合掌し 御座なりにしても陽気な酒に酔ひ

眼にものをみせてやつたよ蚊を殺し 御対手にされぬ筈なり役変り 言い様のない寂寥で妻の留守 内職をきゝに出掛けておごらされ **我橋飲まして欲しい人に遇ひ** 恋愛至上なに六十の遅かろふ 現実はきびし夕餉の皿の数 いそしと迎へてくれてむさい部屋

> 筋 むし吟社(大阪市)は「たまむ 梓されたもの、非売品▼川柳たま の三十五周年記念の一つとして上 高田本町二ノ一四五九川柳きやり 集」が一月十五日に東京都豊島区 がある。定価二○○円▼「周魚句 跨握つてみせるなり」「五六人ツ 病臥中の編纂になるもの「黒髪の 行された同氏は「番傘」の重鎮で が十二月下旬に大阪市北区天神橋 れた。▼生島鳥語川柳集「鳥語」 同社に於て開催種々柳談を交えら 後六時から東野大八氏歓迎句会を 柳社(愛媛県)は一月二十三日午 は川柳きやり吟社の主幹で、同社 吟社から発行された。村田周魚氏 し」を二月から復刊された。▼不 メらなずいて帰るなり」などの句 一丁目二七生島鳥語氏方から刊

二田一三夫氏(大阪市)は二月か 病気の由、全快を祈る。 幹事長岡田鹿の子氏令闘は旧臘来 ら氏(玉野市)からの消息による 読者応募、紹介に尽力するとのう 歳氏は青森の元みちのく吟社を主 師になられた▼小林不浪人氏が ら発行されるキャッチ・フレーズ 氏を招き会陽川柳大会を開催され 来子、服部十九平、延永忠美の三 と二月二十日同市主催で、大森風 れしい消息があつた。▼渡辺あき 字されていたが宿痾のため戦後は 月十九日に逝去された行年六十一 という研究誌からの要請で参与講 たとのこと。▼堺川柳人グループ 者倍加運動の線に沿らて同地での 全く柳界から遠ざかつていられた ▲山田陽々氏(石川県)から川雑読

悼 句 追 裡

光

明

寺

柳話 「支店長」緑 「ピアノ」 「遠 慮 いわを選出の 麻生路郎

句評 川 水谷鲇美 誌



日時

神方に • 神経性不泯症 IJ

天王寺区下寺町二丁目六

ス停留所前

場所

三月十三日(土)午後六時

フリンセナン 30歳 (80円)・100歳 (200円) 錠

庭師来て木は散髪をした 春ともなれば雪も色気があるよっな

B

用心に無駄

な燈

つけ

未

亡

初

恋

0

人の不

遇が 5

痛

まし

同

又遇うたなど大阪の狭いこと 供出をせぬ仙徳でもてなされ 看護婦に賴めばアタつてゐる林檎

高大田市和

岩垣日本村

ある。

ような手法になっていて、名句で

と詠まれたのは、何だか夫婦似た

酒をつぎ

のんでほしやめてもほしい

パチンコをする間も進

備 < 尻向けた読書が妻の気 借金も知らず金利

E 知らぬ

入らず

岡山市

宗高八ツ茶

同

同

乃女史が、

と、頭の中にひらめいてくる。葭

嫁ぐ荷に月賦で買つたものも入れ和歌山市秋月 郎

肩引に始まる社長の立志 置物のように日向に老けた 兆がどうした僕 スコットいどしや彼女の手藝品 コョンにきびしい霜の朝となり

は文無

同 同 同

談

貝塚市

祖

母

宏方 アクセサリ 賴りない方に女は惚れたが 光陰を軽んじ学生坐 婦人科へためらう妻の 批評家が褒めてくれたで又赤 デパートの 人形の冷たさ去りし マンホール土工お書へ這 ヌード集見ているとこへ御回診 は 終 れり 配達 ーマーと「ライフ」を持つ女 檄 来てる二号邸 文雨 尻 君 b 12 ひ上 K を押し 込み 似て 82 n 字 9 貝塚市 大阪市 藤村 津田 同 同 同 同 同 千舟 梨花

この

道

永劫

消

えぬ

大

籌

スクーター村のあんちやんでは見る

人造米のことはまだない料理本

幾人を抱いたことぞ女將の手

同

句集「旅人」を読む

伏見 同 兒郎 祝 THE PERSON NAMED IN COLUMN TWO IN COLUMN TWO

士野鞍

路郎さんの句といえば、

一番に

俺に似よ俺に似るなと子を

「旅

で、この句を思うとすぐに、古句 その頃に覚えているのは、 る犬養毅 本能寺はしの歩をつくひま 待つたなしの歩にさされた

で、一入深い共感がある。「待つ で、私も一人娘を亡くしているの 第三には 一緒に思い出すのである。 はなし 子を死なし学校に子の多い

親の威を借つて子供

h

大阪市

高田

一夫

水

仙

0

水

か

切

てた

枕 老

元 W 3

同

公約のづれを時

罪

12

す

同

カン

内職を持つて情夫はきてくれ

愛知県

寬虚

表彰をされる程

女事

務

は

同

もて過ぎる話

を友は

して

帰 濃

男嫌いそんな筈ない紅の 札束を切つてもてゝる味

3

末の子の志望バレー

よく泣いた子だつたけれどきお嫁

又肩で風が切りた

守衛

腹痛を知らずお隣ジャ

どうだとも言わず追拔

4

械 入 弛 軍

今治市

文庫

講習を受けた料理に手間

1

恩師もうあの頃の意気持つていず 碩学の白髪は弟子に取り卷か パチンコに似てちやらくと言う女

岡山県

梶尾

節子

U

なさ

一つずつカッギ屋の

気 む

3 再

傘をども言う人も

なし

旅

0

雨

誘惑を拒め 弱点へ本妻やつばり落ちつけ 彈けるのを言えば出て来る婆藝者 松 子沢山 おごられる方をおでん屋 カーテンを替えて間借に嫁が来る 京の夜は舞 屋上の稲荷 六甲を飽かず眺めて病 土藏附きの家を描いてる二階の子 陳情が今日もひるめし食わさな 賢母型碁打ちに出るも好かぬらし 給仕今日小言の取次ぎもさされ 端近かに掛けたまんまで無心らし 寺の事に何かご出向く いきなりに男火鉢の火を 新聞を犯人そしらぬ 下手なくせどんな明でも知つてなり 炭をつぐお女將四十に 掃きだめで多がこせてる 見覚えの煙 表 パートのあんな処へ葱を植 題 行機へ入れて二人の飯 0 床え十 引 など 內 おりてローカ .0 角 意見が ば生 体に 乗って 3 妓 九 0 突 法 0 0 尻 小 社 活 杓 律 を 春 違 名 店 0 で 向 IL から 少 か か 5 んで H 顏 齢 あ 道 手 線 また変 父 L 忙 訪 冬の ひ 心 断 で読 を 7 に 炭 3 にする L n 8 曲 たれ 洗 L なり 得 65 3 撮 0 う え 3 す。 ò b 愛媛県 西宮市 岡山県 姫路市 愛媛県 愛媛県 大阪市 滋賀県 大町 難波 小浜 安井 土守 同 同 同 同 高 同 同 同 同 同 トン 曉重 別城 牧人 文化 愁夢 曉明 蜂呂 坊 まっごとの 英字新聞視 妻よりも二号のこわいひどになり 何 年 更 何になる目 腹立つた様に女 最新のヒットソングでそばが来る なめくじのような强きで易者生き 高 7 ちど足らぬ癖に私をも 階 野天風呂妻はなかく 好きですど即座に答えまごつか = 出 焼鳥の匂いで駅がすぐ分か 賣出しにはさまれてゐ る 佛 父の真似あぐらを組んだ 陳 実力の差とは哀しきブ 山がきれいで友あり酒 老 三十才の帰 記者の眼にこゝの廳舍 利貨 情 から 境 賀 年 コョンが審判し 段 * 妻 バンは一級銀行すっ 男 0 心 をない 團 狀 期 え 妻の ない 3 苦 熱海 中 障 錢 道 線 女ごと 的 省 央 害 顏 場 恋愛に見 形 め 0 具 集めて 薬の 8 0 \$ は 合 宿 L 平 K 10 母 なく子 事 かい 編み T 昇 は宥 を な T を 次 多 写 探 3 這 0 0 る T 5 香 寸 養 放 を 入らな 湧 ついけ され 女 1: 眞 は 8 あ 步 伏 すこと 読 見 -3 触 闘 藥 出 b 育 5 野 2 四 壇 0 魔 3 n 3 3 子 瓶 n n ち 3 n び す 屋 す ル 殿 せ 岡山県 大阪府 米子市 大阪市 高大田 大阪市不二田 尾道市 高大田 大阪市 市和 市和 太田 戶田 南部ひでを 若本多久志 戶 同 同 石川ひさみ 同 同 同 石田 同 同 田 伊津志 一三夫 悅子 沐天 嘉 あつた。 もう未練ない

句として、使わしてもらつてる。 二十余年前の拙著川柳講座に、 たなし」「のんでほし」と共に、

かつたので、うれしく感じたので あつた。私の記憶もちがつていな 柳五十年記念に、「旅人」と題さ と、それを一番に探した。あつた て、まず、右記の名句があるか! れた句集を出された。早速拝読し を追加して覚えていた。 ところが、今度路郎さんの、 古くとも僕には仁義礼智信 凡聖一如元旦のこくろ知る 三人が酔えば三人らしくなり

の九句は 〇をつけた。勿論前記の六句もそ ゆるし願いたいン十五句に、三つ 郎さんに失礼かも知れないが、 の内に入つている。それで、 そのうちから三選してへこれは路 の心で五十句にマークをつけた。 そして、 四度読みかえして、 あと

君と僕 その嘘に女はすがりついて 金は無くとも金はなくとも

行来はどうあろうとも火の 定食へかひこが桑を食ふ如 **甌落に旅の花火の淋しくて**

むつとしたが子供の頭撫で

THE PARTY OF THE P 1700 11 下流水

福 今日 愛人のあらが目につくの 俺よけて師 今日アチャコあるなど子供おきとい 鼻 質知子型ショールであいるようで来る 華族出の姐さんほこりも捨てちま 中華そば食 子の鼻もふい 遅刻した会議 服 才だけで駄目な職場もあると知る 夜の部がはねたら傘を賣つて居た 同窓会浮気の手ほどき受けて来た 元刑事を聞けば成る程そん 大安が未だ 御馳走になった酒だと妻 わが思想とは違う闘争指 摘 感染つてもかまわぬ咳を寝 老 写真屋はかつらの方へ気をどられ あかぎれの手が三味線もひきこ 曜日こんなに晴れて金が 円のおつりをもらうてれくささ 領 草 なき 裝 妻 声 引 で 0 も化 0 0 は 0 子 肩 樂しさ急行 嘘 社 暮 0 感 揉 昨 粧 本家で 走 つてた 長 < ませてる腕さなり 叛 を H 火鉢 K T 襖 ŧ 6 神 金が 0 主 違 蝈 0 た 恋 嘘 人を に遠 は 樣 色 to 3 子 巾 渦 3 列 8 ^ 日 名 から から 懐 叉 待 4 利 車 B 卷 令 初 ている気 ななし 曜 あ 年 な額 付 帰 3 違 つタ 居 カン 言 4 行 詣 H せ h B せ 4 6. 大阪府 新潟県 岡山県 大阪市 岡山県 福岡県 滋賀県 愛媛県 大阪市 早川 三木 久保 同 同 同 同 同 近藤 高野 同同 岩田十三楼 同 同 森本黑天子 永松東岸子 同 多田野保子 同 同 同 同 同 同 同 野甫 奇草 不二 泡起 和友 外科へ来てパチンコだこを笑はれる 孝行をするに 三ケ 年まで 飲 電 恋愛を大にたどえてザ 何 宣 何 ランドセルばかりに見える入学日 財源は値上げをせねばないように 女一人忘れる爲の酒 ミノ虫は梅の香りへまだ 朝霧の中まことに雲を喰 0 商 恋人の人の 母若くラジ 貧乏性では田に付い お茶漬は母一人だけ食 本当は札束だけが 僕は百姓基準法では食べられ 眞知子卷き北海道でもあるまいに もういいよ影に気づなカク 百姓嫌よど判 一号邸とは知らず赤ん坊よく眼 ながれた馬は子供 の位が美人かしらご鏡 燈 から 傳 恋 魂 < 日 に答える様に L 孃 年 0 は 成歳と 過 0 0 3 眞 金で h N 去 好 え 赤 オ は 6 ŧ 6. 体 に H 8 8 女 然 别 晚 K 都 塗 あ 操 算 が気 な声 0 酌 ま 4 9 たる 好 会 0 盤 悅 女 梟 だ 21 ナニ 女 1 3 1 金 親 12 ŧ を 子大出 を飲 T ゲ j を に 浪 から 稻 わ 宿 ね で か L レン 出 0 入 を見 光 あ 0 4. 荷 8 命 む 曲 4. 如 ス ŧ 1 b 5 男 3 3 す 3 ボ 3 派 Ut h 3 師 Ξ か 駅 阿山県 神戸市 岡山県 松山市 大阪市 岡山県 貝塚市 京都市 堺 倉敷市 市 古閑森行水子 金井 野 同 田淵 長尾 同 同 同 小 同 同 堀 同 同 同 同 田 同 同 同 島さぎす П 文秋 初甫 笑鬼 越鳥 紫笑 圭水 霊子 欣 げる。

外国の例で市長は切抜ける

力である。 である。 が、これは「旅人」には見当らな という句も、覚えているのである われているようである。 路郎さんの句には熱がある。 俺の子を俺が折檻する大工 握られることを忘れぬ苦労人 「どうじやく」とい

を覚えているが、 かつた。もら一つ るさらな 子をつれて仲居になってゐ

れない。 ら、これと違う感覚であるかも知 いらのがあつた。 また時を経て読ましてもらった 噂に聞けば仲居になつている

「旅人」御刊行のお祝いを申上

川 柳を斯く思う

木 摩

天 郎

でつめて鏡に写して見ると、 うである。しかし、自分の頻を右手 素の状態と異なりたる状態を云ら んぞやと云う定義に、 其数実に、一万三千に及んだと云 と云う事について調べたところ、 と仮定した場合に、一応尤ものよ **う事である。今仮に、病気とは何** 或宗教家が、宗教とは何んぞや 病気とは平 確か

ALL STORY OF THE STATE OF THE S THE L

ガム噛んであちら好みの 食うてねるだけの暮し 海を見ぬ淋 父と座せば 第六感外れ 二つ三つ叩いて大鼓か 舟はもう港に這入つた 血圧がどうのこうのと 運轉手アッと言うたは 高島田咳拂ひだけでは振りむかず 糸屑がなど そ娘の寄 儲けても居らぬ仕事へ酒 歳事記にストも入れた し 病薬も鳴る日今日も無 寢 殿 元旦の誓い破つてチン 泣きだして 生 交叉点子供 モーニング謹嚴そうに酔つばら 来ねば来ぬで風邪を楽じていてくれる 米の 室 りは 道 当 活 直 皷 旦 を 革 3 は 8 を 勤 させてく 飯 母 命 家 大 r Û 湯 8 妻 正 术 へ象 四 0 根 D から H T 0 月 3 熱 IJ + ような母を 臭 本 貰 中 早 運 円 3 ス 牙 だ か 5 6 n K だけ は 2 h は 4. 0 出 H た 当 な 轢い 除 ヂャラジ 家 音に 0 3 金 事 を 向 つてく L 箸 荷 0 樣 を + 夜 出 K 街 散 4 赤 出 に 島 心 を T 時 なり 淋 た夢 二月 革 を な < 0 0 せ 樂 6 住 育 か 貯 せ 艘 期 髪 5 U 3 n + す 嫁 瓶 え n 8 0 勒 山口県 兵庫県 岡山県 愛媛県 岡山県 熊本市 岡山県 岡山県 大阪市 大阪府 宮崎市 出雲市 吉原 村上 吉形 岡本 国島 高野 野口卯之助 国富 安井比佐志 同 同 同 同 同 穂北ベン郎 同 同 原 同 同 大塚美能留 同 同 同 直人 旭童 鳥石 紅月 孤舟 宵草 独仙 朗 空 女房 後 子 枝を折るとはみの虫も知らなんだ 膝 花 平社員此処 書き終えた賀狀にふつと老を知 惜別のせめても髪をさい 高利貸それでも 老人会など と 益 もてなしの酌も夫に気象 女性から貰つた花だ枯 氷嚢へ見舞あつさり引き かるた取りでしを叩くコン 羽子板にまだ生きて居た成 女教師の日曜眞知子ストールし 押賣りへ時勢を説けば笑るて去に 妻も早や文樂を言う歳になり 行李の底あけたら戦果 口説くにはあつらえ向きの雪とち ねどられて二尺の袖 ェプロンの白さ失意の コンパクト婦警もしばし待つてより 添へ 屋 を負うた 嫁 想 風 8 には を足で 8 6 12 崩 堪 長 40 雲 3 え で怒 少し可 女の える 3 す 夫を 起して E 流 朗 n p 返 心 林 2 n 笑い 連 カン ば首 は 3 事 0 あ よく n 腹 眼 j n 悄 左 逞 から 現 恐 無 3 あ 3 T ね 0 か から K T 父 パクト 6. 寄 げる 飛 L 実 # 駒 L 精 炬 初 は L 如 笑 立 痛 や T 詣 父 1 T 家 4 び 4 1 燵 4 ち 4 髭 L 酒 3 h 大牟田 岡山県 大阪市 岡山県 愛媛県 大阪市 兵庫県 大阪市 大阪市 高大田 高知市 大阪市 岡山県 大阪市 市和 市 光好 本多 小川 丹波 小 木村 中谷川太郎 岡 片山 H 里 同 酒 同 同 板東千代美 同 和 同 同 同 同 同 井ひか 野青柳子 田 田 十悟 四詩 省三 元馬 夢介 青泡 巷 太路 0 2 字 + 平 丽 えないかも知れない。

朗かな生活、楽しい人生!川柳を 困、修養の乏しき事も貧乏でなか 思いがする。貧乏とは何んぞや、 手を離せば元通りである。 に右の頬のつままれている部分 以つて自己の生活を明るくする、 えるのではなかろうか、心の修養 ろうか、そらすると貧乏の数も殖 物質的のみであろうか、 を意味しているが、果して貧乏は 貧乏とは、貧しい事を云うと解釈 の至難な事が、これを以つて判る この意味に於て、精神的に恵まれ したとすると、それは物質的貧困 たる現象を呈しているけれども、 に川柳家は、あながち貧乏とは、 精神的貧

その昔法学通論で習つた。 人とは何んぞや、何時より人な いずくに於て人なりやと、

象凡て川柳の対象となる、 なものに違いない。 ケ敷いものに違いない。 か、川柳は六ヶ敷いとも云う、 ある。川柳は宇宙の大現象森羅万 何なるものなりやと考える時に、 始りたるものなりや、川柳とは如 柳は宗教である。川柳は哲学で 川棚とは何ぞや、 而も奥の深いもので無かろう 川柳は何時頃 奥 0 深淵

活の資と為そうと私は斯 の詩に依つて人間を研磨し、 十七音字中心の人間陶冶の詩 修養の方面に生き甲斐ある生

William Control of the Control of th

此の 銀時計これは恩賜さし 儲けどる証拠二号が派 掛取りが風邪の見舞を言うて去に 肩書ではあの 地位などは 御歲暮へ肩 悪縁をつな 本当の方針 遮断機の無情まだし 今日あるは失恋のおかげと立志傳 老い淋し子等いつしかに遠ざか 徳球も生きているらしメッセージ 金策へ月があんまり 借金が有るので競輪や 粕汁をかこん 宿直を下戸 お茶たてる娘 冷え症はスタイルなどと言うとれず おめでとう雪もついでに褒められる 年の計ただ タンドの 勘 運 頃は円満 がちど多すぎる 32 映画「東京物語」 妻に見 問題ぢやな 祕 虫に故郷え か 書 4 妓陷落し 書に 頑 だ 增 らし 8 歲 つきめ えた 子 3 家 暮 張 n 等 で か だ n 4 は まい 名 明 手 T # け 8 便 1-届 手 遅 3 0 生 けら 紙 給 夜 せ 横 刺 K \$ 刻 H るすぎ 5 頰 h Ξ 込み 来ず 料 永 h 坐 贴 な 5 3 記 n 0 書 5 ょ h 3 L 日 帳 す 艷 U H せ 1 岡山県 出雲市 岡山県 石川 今治市 具塚市 鳥取市 大阪市 大阪市 京都市 出雲市 倉敷市 福田 越智 谷口 小原 北村 佐藤 吉村 岩見 平井 同 玉 同 水島風の子 同 同 同 同 同 同 同 同 同 正兼比羅 字柳 三步 卓風 義夫 流水 澄泉 泰三 松庵 芳風 + 3 外餅 初詣 年賀狀今年 力 バスガール不明朗 忘れ物飲んでる 義 諦めた手紙が 逢ひ引きの 初 赤 噂も立てず女 正月もぼ 本望の死に 青い目の見を抱き弗で家 H うるさ型丸くおさめた 訪 ネクタイにぶら下るよな愛に生き 恋 今切らなで直ぐ死ぬ様に外科は言 良識に問 看護婦で間違えられ 恋の の丸を振つて別 ルタ会恋の歌だけし つたりもお世辞も効が社 拡 文 理 問 松 なぞを出雲の温泉 0 堅 5 0 は 頃に 耐乏 4 代 內 素 0 役 書 遺 3 場 密 時 覚 は 肌 生 器 書 え 敎 所 こうも 買 計 結 沙 は K 活押 方に 用 ^ 父の 得 す 師 金 さが は た 婚 風 n 0 借 な 駅 0 老 1: 7= 7: L τ 3 11 寒 L 板 生 金 敎 かど取 で又 ろと 4. な b 女 0 積 に 長 1 납 未 春 カン 医 0 n 明 4 か に え 酔 T 4. \$ h 亦 < の顧 3 合 迎 亡 重 V な 細 うて な あ 10 時 建 0 最 0 3 0 0 逃 3 3 5 3 分 橋 え T 顏 後 3 b 人 b n 書 L 問 詩 h げ 山口県 島根県 赤穂市 広島市 和歌山県 愛媛県 出雲市 和歌山県 大阪市 尼崎市 和歌山県 群馬県 岡山県 石川県 津山市 倉敷市 岡山県 堺 市 西岡 檀原伊 鳥井 深田 藤川 德光 眞野 萩原 藤井 桑山 Ш 御戶 田 野 松島 芝原句浪人 同 久家代仕男 同 同 同 西 田素身 中無津美 天波 不在 凡平 佐武 松平 竹郎 明朗 とよ Ш t 春風 門 鳥 郎

> 己の姿を写す生活派の川柳で る。 てはならない。 遊 自己の生活をよりよくする自 川柳は遊戯であつてはなら びの川柳では無い筈であ 無く

啄木や、 活に即した句を作ろうでは を突くように、 よりも、 蒲団をかぶつて作った万葉歌人 私は斯く考える。 貧苦と病苦の歌人、石川 田波御白の歌が人の肺腑 にじみ出た句、 ts 生

うそと川 柳

久

保

和

友

らのがある。五糎か三糎ぐら サビをきかして世相を調刺して 枠のなかにピリリと三行ばかり くぼ、ウソ横丁、ウソクラブとい つとして、VSO放送局、 此頃の新聞にユカイな欄のひと かたえ

群馬県の小和瀬忠雄という人の 昨年の読売新聞の年間最優秀賞 ンを十個捺してパン 水害地余話

被災者

(群馬、忠太)

一個もらった

そだつて言えるのである。らそは 悪口も言えるし、再軍備反対のう 方便というがこのうそは真に迫つ 喰つている。ここでは吉田首相の というのであるがなかしく人を

親と子と馬鹿にしあつて家樂

П

手

か 仲

> 人 2

0 2

役 か

果 気

L

T 障

来 h

鹿児島県

近

常

白峰

つてのないの

から

眞

先

K

就

職

U 3

岡山県

佐

*部滿佐志

も忙し歲暮を押賣嗅ぎ

b

H

池田市

太田

同

やけくそだ噂の通りなっ

たろか

和歌山県谷口喜久治

口の 下

一号

に

正だけなんど色気のないはなる和歌山県

細野

の上絵本を載せてドラ

1

ヤー

堺

市

阪口

大三郎 照坊

世話人が三人だけの風 雲行きが悪く入智慧何 痰壺にほこりが積るほ 松の内もう不渡りをつか 鉢花屋 病んでから父さんの愛知りました アベックの寄りそう肩に赤さんぼ 北からで就職ちよつきもめてゐる 婦長さんの白衣インキがついている 掛軸を卷くに 利殖法あれこれ読んで間借りなら 指定席隣の椅子が 付き合がよくて安静み 雑煮餅平癒の 雑談のきつかけは先づ税 の気もなく元旦 東 賀狀 婚 も子の 0 去年と同じ花 楷 姉 書でかいた 倖 催 邪念の許されず 味を嚙みしめ せな 促 に思 気に お を どに 処 呂 だ 酌 ひ出 3 当 まされ 8 老 n のこと カン 振 なる 行 直 癒 あり和歌山県 教 勝 カン す す 7: 師 え和歌山県 3 3 b ち 岡山県 大阪市 尼崎市 倉吉市 和歌山県北平よし子 倉敷市 和歌山県 堺 京都市 大阪府 出雲市 大阪市 岡山県 堺 堺 堺 堺 市 市 市 市 藤田 中辻 横田 武田 奥谷 岩見とくじ 則武 赤田 松本比佐志 坂本竹ん馬 那須虎兒朗 岡本智紗美 久保田青竹 石本 横倉漫多朗 橋村 朗糸 朗郎 貞春 雅方 方眼 弘朗 和子 一雨 直

椎名ひさご 一茶穗 夢兒 竹外 柳生 古心 樂天 桃園 正 金 軍 その道で一流たれどは 呑み過ぎた話へまたも 仲 痩せつぼの裸不安なレン 幸 曲よりも見得い聴いてるベートーベン 落し物 噂ではもう死んでゐる答 マリヤ様私は孕みませ 乳吞子を残しナース ハイヤーはいっなど想う空は澄み パチンコで殖やして飲も、気で出から 神の 直 持へ嫁 運 を税務署からも認められ 0 昔も さすが師走と言 百万円で身 だ娘 あっ ナニ 他 恩師のみ 0 松 から 人めき和歌山県津村 ŀ 82 間 だった 御 薬 滅 ふえ ゲン う所 樣 出 び 杖 に 勤 愛媛県 和歌山県那須 和歌山県 堺 金沢市 西宮市 鳥取市 和歌山県 出雲市 和歌山県 大阪市 出雲市 市 森田 滝田 横田 永藤 苗代 赤松AT公 小林 正口 森山 岩田 原 植田てる子 亀一 称平 辰始

寒いなどだけで酒呑み意

味

通

U n

岡山県 大阪市 和歌山県 岡山県

冗談で言つた噂に 復刻と言えず

で五

尺

0

娘

ぜ

5

富川

なり

松本

夫婦連れ素うどんでつかと念押され 初詣また神様へ無理を言ひ 親切を反古にするなど 意見

され

和歌山県

石川県 堺

栗山

歌

麿

誉めて置き むきに 案

池田

作 家に 1

たりしているようである。し 高くもなつたり、低くもなつ の動揺によって、 ると、生活環境と、その心境 い。そんな作家の句を見てい ろへ寄せられるのであるらし 抜けぬとか云う境地から脱し もせず、幾十年の間句を寄せ て、作らずにはいられないか 云う作家はもう抜けるとか、 私の大きな欣びである。 られている作家のあることは 私のかなりな厳選をものと 作つたから私のとこ そう

> かし、 いるように思われる。 は、どッかに筋金が這入つて そうした作家の句 VC

て欲しい。(路) いる。いつまでも健在であ 透して思想の交流を楽しんで らない。これは全く年季の力 句のデグリーはある水準を下 も時に、抜ける句が勘ないと る。私は斯うした作家と句を が勘くとも、念けない限りは 云うだけである。たとえ句数 とはないが、それは新進より いるように思える時もないこ に外ならないと私は思つてい 時には新進作家に押されて

> 聞の楽しみと言えば新聞の時事川 つてしまわないとも限らない。 柳であるが、これもひとつの川 なつてしまつてマンネリズムにな のがまたのせられるようなことに もヤキ直しとか何処かにのつたも と面白いにちがいないが、これに になるのであるが、こういう欄が たらそ。裏返せば本当ということ ばいふえて各新聞に出ればもつ 行く道を示していて面白い。

変たのしんで作つておられるので はないかとおもう。 時事川柳を発表されているが、 川柳はたのしくなければいけ 路郎師も大阪新聞に毎日曜日、 大

ておられるからである。 が、紹介するのも誌上に顔を見せ 氏がいる。標語の名人でもある ソグループの一人、不二田一三夫 叱られるかも知れないが、 ろうとも私達なりのへらず口へい ではなかろうか。世の中がどう変 楽しさであるが時事川柳もそんな あたり前のようにのべられないこ いたい)ことは残しておきたい。 ところにひとつの楽しさがあるの とをずけずけ言うのがこのうその わすのだからとも言えるが、 ことのウップンを短文にしてあら べたらそものも普通のべられない い。これは私の持論だが、先にの 因みに
らその
大好きなと
言えば 関西ウ



(下)

富 士: 野 鞍 馬

兵を用意して、 遠くへ流し参らせんとし、軍 法皇を、鳥羽へ軟禁するか、 白河法皇の策謀なりとして、 合の、平家打倒の陰謀は、後 盛は(六十才)前の鹿ヶ谷会 治承元年(一一七七)父清

当人が申す事に、君のつかせ給 づらもの、西光と申す下賤の不 ひて、やくもすればこの一門亡 の用意せよと、侍どもに触るべ り、矢をも一つ射むずらむ。そ ば、定めて北面の者どもが中よ と思ふはいかに。その儀なら れへまれ御幸をなしまるらせむ 移し参らするか、しからずばこ ほど、法皇をば、鳥羽の北殿へ るまじ。しばらく世をしづめた て後は、いかに悔ゆるとも益あ されつと覚ゆるぞ。朝敵となつ 者あらば、当家追討の院宜を下 るべからね。この後も讒言する さるべき由の御結構こそ、しか 「それに成親といふ無用のいた をねめつけて、日く

て、この有様を見、一門の者 服)姿で、急ぎ西八條へ来 でなく、烏帽子、直衣(平常 30 といったと「平語」に見え きせなが(大将のヨロイ)取出 これをきいた重盛は、軍裝

のは、昭和廿七年の三月であり

点からみても、花鳥諷詠詩として 間諷詠詩であるという本質的な観 ろう。川柳が庶民文学としての人 現川柳家の深く反省すべき点であ と説いているのである。この事は の簡潔さと対照を見出している」

の俳句とは、根本的な相異を持つ

私が最初の川柳雑誌を手にした

述べさせて貰います。

好の一人として、客観的な立場か のの知識は無いのですが、川柳愛 すから、まだ殆んど川柳と云うも 十一月初めて句会に出席したので

時代と呼ばれる時期があつたにし

ている事は当然のことである。さ

ればこそ一時狂句時代、所謂暗黒

や末になりぬと覚え候。人の運 児根命の御末朝の政を掌らせ給 大神の御子孫国の主として、天 栗散の境とは申しながら、天照 覚えず候。さすがわが朝は、辺地 見参せ候ふに、更にうつつとも 思ひ立ち候なり。また御有様を 命の傾かむとては、必ず悪事を 節を帯しましまさむ事、内には づく御出家の御身なり。それ三 官に至る人の甲冑を鎧ふこと、 ひしよりこのかた、太政大臣の 破戒無慚の罪を招くのみなら ぎ棄てて、忽に甲冑を鎧ひ、弓 礼儀を背くにあらずや。なかん 「この仰承り候ふに、御運はは 解脱幢相の法衣をぬ

背き候ひなむず。かたがた恐あ ず、外には義仁礼智信の法にも る申し事にて候へども、心の底 ずといふことなし。(中略)い 王の恩、父母の恩、衆生の恩こ まず世に四恩候。天地の恩、国 に旨趣を残すべきにも候はず。 以て、蓮府槐門 りし太政大臣を極めさせ給ふ。 恩なり。普天の下、王地にあら れなり。その中に最も重きは朝 神、正八幡の神慮にも背かせ候 傾け参らせ給はむこと、天照大 給ひて、みだりがましく法皇を 大の御恩をおぼしめし忘れさせ 朝恩にあらずや。今これらの草 く一家の進止たり。これ希代の は一門の所領となつて、田園悉 る。しかのみならす国郡、半ば いはゆる重盛が無才愚暗の身を かに況んや先祖にも未だ聞かざ ひなむず。」 (大臣)に至

ば、かなはざらむまでも、院中 てこそ候はむずらめ。悲しきか 御所法住寺殿を守護し参せ候は む。これらを召し具して、院の と契りたる侍ども、少々候ふら ば重盛が身に代り、命に代らむ むとすれば、迷盧八万の嶺より な。君の御為に奉公の忠を致さ ば、さすが以ての外の御大事に し。(中略)その儀にて候は 「これは尤も君の御理にて候へ (法皇)を守護し参せ候ふべ

ひ切つたり。馬に鞍置かせよ、 し。大方は入道、院方の奉公思

111 端

を避け、リズムとメロディーを欠 いているが、素堂の句にも勝る程

川柳は故意に俳句の「詩的」要素

る。又俳句との比較において、 じ意味で詩である。」と述べてい

聞いたかと問われ喰つたか

と答え

古川柳

目に青葉山ほとくぎす初鰹

ら現在の私の川柳に対する意見を ある。川柳の文学性についてR・ 品の価値が決定されるものではな 戯にあるとの故をもつて、その作 ろう。しかし文学作品の動機が游 らに、川柳もその発生は遊戲的 粗野で異つてはいるが、俳句と同 であると云える。第二に、取材が のをはつきりと示す点において詩 来る。第一にそれは詩的でないも Hブライス氏は、「川柳は多くの い。結果によって決定さるべきで 点において詩であるという事が出 「点取俳諧」にあると云えるであ すべての芸術がそうであつたよ ても、今日大衆の支持を得て再盛 ある。この観点から川柳家は文学 多留の根本理念は不変である筈で なる。勿論、柳多留が川柳を決定 離れなければならないという事に きあげようとする事は、逆の意味 を見るに至ったのである。 あつて、独りよがりの文学論、芸 は第三者によって決定さるべきで ずべきである。文学であるか否か とか詩とかの芸術理念を離れて、 する総てではない、然しながら柳 においては、川棚がその本質から に、川柳を純文学の地位にまで引 術論を説いても、おざなりの宣伝 般大衆の要求に対して忠実に応 川柳家が、川柳を愛するが故

非いかんにも辨へ難し。申し受 罪を遁れむとすれば、君の御為 され候へ。 くる所詮は、ただ重盛が首を召 べし。進退これきはまれり。是 には既に不忠の逆臣ともなりぬ とす。いたましきかな、不孝の もなほ高き父の恩、忽に忘れむ

出して、諫言したので、この 盛は、言つた通り、西八條よ ろで、「平語」にはまた、重 れてるのである。この場面 あつた。これで重盛は、三忠 威したので清盛もへこたれた りも多数の部下を集めて、示 は、芝居で観ても痛快なとこ 臣の一人として、今に讃えら ところは無事なるを得たので と切べ、涙を流し、命を投げ と書いてある。そこで川柳

重盛の意見入道らんざりし 十かへりもおいさめ申す小 (=11四)

三年(一一七九)重盛の病気 等と詠んでいる。 それから二年経つて、治承 ほんとうに紙をやぶるが小 不埒親父に小松屋のしけ困 重盛は身に替え道を説き給 (》一六〇) "

> で、清盛は、福原に滯在中の らえといったが、重盛は、 中国宋の名医を遣し、診ても はつのり、衰弱が加ったの

ものである。 わなかつた。佛道に大悟し て、当然の言であるが、偉い て、安心を得ていた重盛とし といって、宋医には診てもら を存せざらむ。この由申せ」 うは国の恥、かつうは道の陵屋 道なきに似たり。医術効験なく の業病を治せむや。もしかの医 ふとも、いかで国の恥を思ふ心 なり。たとひ重盛命は亡すとい 浮遊の来客に見えむこと、かつ く本朝鼎位の外相を以て、異朝 ば、面謁その詮なし。なかんづ 術に依つて存命せば、本朝の医 て、衆病を癒すとも、豈に先世 「たとひまた五経の説に詳にし

重盛の死を惜んでいる。 たらしく考えられる。川柳も は、現今でいう肺結核であつ として、往生を遂げた。病気 八月一日に、四十三才を一期 して、浮蓮となり、三日後の そして七月二十八日に出家

重盛は花を咲かせて早くち 若死をしあてた人は小松殿 死んで惜しまれたは小松殿 (タルー二八)

> 作るはかりの作家には進歩なる 常に「川柳雜誌」によって研究せよっ

半分は夢を見残す小松殿 小松殿一人後悔先に立ち 今に見ろよとは重盛がい」 11 「川一八

なかつた。 それから平家は六年しか持た 歴史は変つたかも知れない。 重盛が達者で長生きしたら、

小松殿以後 一門は海のもの (タル一二七七) 11 五

また幸福ともいえるのであ 亡びる前に終命した重盛は、

も葉も絶えたのである。 られた。これで平家は全く 三年〈一二〇二〉三十才で斬 途中、相模の田越川で、建仁 召捕られて、関東へ送られる 禪師として隠棲していたが、 預けられ、高雄の奥に、三位 代御前も、出家して僧文覚に して果て、孫(維盛の子)六 月二十八日、那智の沖で入水 し、二十七才で、壽永三年三 將に進み、出家して淨円と称 そして嫡子維盛は、三位中

小松殿草葉の蔭でそれ見た 小松殺よい仕舞だと船でい

も止むを得ない事である。 第三芸術・第四芸術と云われる事 んや、川柳の本質を離れた川柳が え今日第二芸術と云われる、いわ 的観念を要求する俳句に於いてさ 倒れに終つてしまうであろう。美

なる意味に於いて、川柳の詩的文 は、人間性の真をつき衆望に応え も名句として引用され、川柳のバ ない。然し、川柳点か今日に至る 百六十七篇として終つたかも知れ あろう。只風俗資料の一文献とし 何らの価値も認められなかったで 四篇迄も前句附としてより以外に なる名称も川柳点になる柳多留廿 としてだけであろうが、もしその ているのは、単に風俗研究の資料 を有しているからに外ならない。 学性が認められており、存在価値 た事は勿論であるが、俳句とは異 イブルとして珍重されているの て他の柳書と共に、単なる柳多留 くまでも川柳の根本理念であり、 留に帰るべきである。柳多留はあ 留を検討する必要があり、又柳多 一事に尽きるとするならば、川柳 そも人人柳多留が今日尊重され されば、現川柳家は今一度柳多

然である。 り込まれなければならない事は当

去り、宿借り的でなく、新興短詩 前途を決定するのではあるまい 作家の「節操」と云う事が川柳の として、堂々と文学界に一旗あげ として新らたに銘打つて独立短詩 きた純粋詩短詩を主張する者は、 そうであるが、最近盛んになって 言はお許し願い、諸先生先輩の御 信と努力を持つべきである。川柳 るべきであろう。又それだけの自 いさぎよく「川柳」の名称を捨て 川柳だけでなく俳句においても 盲蛇におじず、初心の浅学、

数示をお願い致します。



内小児科科 平

現代川柳ほその中に近代感覚が盛

大阪市南区日本橋筋ニノ七〇

不

西尾

栞

氏

会 か

朽 洞 らBK第二放 八時十五分か 三月九日午前 (大阪市) は

川魔花麗氏 崎の駒井昌坊氏の趣味の店喜楽荘 る。▼麻生路郎師は二月七日に湯 入選天位の句は長田御嶺氏の「こ 人のために気を吐いていられる、 年応募川柳の選評をされ、海外柳 哇報知」の一月一日号に川柳随筆 酒」並びに同社の依嘱により新 事長中島生々庵氏は川雑本社の 「卒業」 楽焼に揮毫された▼本会 家を支え酒ものみ」であ (ホノル、市)は の選評をされる▼古

がおくれ中島生々庵氏に会えなか つたことを残念に思う旨の来電が うとの通信があった▼木村孤浪氏 えなかつたことを非常に残念に思 から旅行中だつたので一月廿四日 れた由。▼宮田不二氏 われたが、あの大雪で汽車が延着 中島理事長を迎えるため横浜に向 十三日病中の夫君満年氏に代つて ▼藤本菜々氏(東京都)は一月一 面接せず二十五日朝帰阪された。 用務を帯び一月二十三日上京され に上京された中島生々庵博士に会 したので生々庵博士に会えず、山 たが折柄の東京の大雪で誰人にも (東京都)からも病気のため連絡 楼 居 を訪問、 東京へ引返えさ (東京都)

無用 ば)を提唱多大の好評を博され て晶子スクエヤー ら見た堺」の特別寄稿を執筆さ 機会を期されたい▼築山快夢起氏 は会えなかつたのであるから又の あった。何れにしてもあの大雪で 目下堺市が計画中の仝市の生んだ れ、二月五日の仝紙上を飾られ、 大阪新聞社の懇望に依つて「外か をされた▼路郎師は堺市の日刊南 は自宅を大阪市阿倍野区松崎町三 与謝野晶子女史顕彰の一方策とし 丁目一〇番地に新築されていたが (ボノル、市)は 月廿六七両日に新築落成の披露 月一日号に随筆 一を執筆され た▼松江梅里氏 (あきこひろ 「犬猫の外小便 「布哇報知」の

られ、その夕刻に大介氏の祝賀電 報で初めて山陽川柳一席入選を知 祝い申上げる。 り、夕食は、 正月元旦を同県下津井の浜で迎え で地久平氏が獲得されたと。なお 新聞二月四日号の学芸欄に「時事 帰郷された。▼麻生路郎師は山陽 路郎師の句集を手にして二十五日 滋賀県へ帰省、 島県)は一月二十三、二十四両日 た由、誠に羨望の外なしである。お た。▼本田恵二朗氏(岡山県)は旧 路郎師賞とされたが、一月句会 揮毫の「酒の軸」を大原諷柳会 本田恵二朗氏(岡山県)は路郎 柳の投句家へ」を寄稿された 忽ち祝杯の膳と変つ 春巣氏に会われ、 ▼山田季費氏 (出

る

H Ш 雨 楼 選

自信ある妻は勝手でロずさみ 要持つてちよっぴり過去にある未練 見惚れとる口絵に要は稚なかり 美婦適 木 青 柳 声

汐湯以来二十年振の喜びであつ 先生と入湯を共にする事は大浜 で湯にしたり波を聞き」と作句し 山県白浜温泉に遊び「師と共にい 里嬢に同伴して維声君と共に和歌 は二月七日一泊がけで路郎師、梨 孫で国語国文学界の大先輩。▼私

欺され 妻にだけ打明けている使い込み 病臥せば妻が菩薩の様に見え 来て見れば俺は 爪染める要を少々もて余し 損してるバチンコへ要の迎え傘 要として 内職を持つ妻にしてよく喋 病み上り妻の化粧が痛々し 岳父に似て妻の観骨たくましく 合所ころで不運をかこつ妻 除夜の鐘響いて妻の愚痴がやみ 戦争肺病妻にばつかり苦労させ 要君に日本を見 沢 Щ 夫忘れたような て居る女房 働く畑 婿 世 0 殿妻 土固 0 羽 倖 0 田 里 3 要 1 3 着 十九平 七面山 十九平 東岸子 満佐志 多久志 恵二朗 万 灯 英 香 T 宽 古 华 子 林 介 坊 脆 花

よくしゃべる妻に任かして席を立つ 希望遠くとも妻とふたり 故郷で勝気な要の涙 婦人会妻の踊りに丈け見惚 編物機要は 気を使い無口の妻が恐くな 棺側の看護婦妻になりそこね 夫唱婦随天理教にて小百姓 倦怠期乗り切る菊を 妻は 流行に遅れる要をよしとする 手の荒れを隠して要に見舞はれる 母と云ふ名に甘んじて妻老ける 美容師のお世辞を要は真にうけて 別れ住み妻恋ふことになればじめ 旅先で妻に済まない線 働く気で通 を 落 活 越 H ち O 9 L へとち 惠二朗 五厘棒 光 維 薬 奇 仙 光 **QIS** 童 雨

された七十歳、

国学者橋守部の玄

太田区久ヶ原四六五の自宅で逝去 大教授)が十九日午後四時東京都 県)の令弟橋純一氏(跡見学園短

午前 えない謹悼。▼長野晴浜氏へ兵庫 い人を失い本会としても痛惜に堪 く知るところであつた。洵に惜し 容、人格高潔、その徳望は衆の克 九月以来作句に精進され、 り上げつ」ある由消息があった。 会も復調、各公民館にも川柳を取 されるとのこと。なお、 販売所経営に専念されることとな 成の準備中とのこと▼尼緑之助氏 谷水、一善氏等と木村千容氏を訪 く発足する川雑倉敷支部のため、 由。▼田垣方大氏(倉敷市)は近 大原支部のために尽力されて 恵二朗氏は、近く発足を見る川雑 の癒養生活の甲斐もなく二月五日 務の全市役所を退職、 に移られ、目下、 休氏は宇部市西区万来町鉄道官舎 出雲市)は一月一日附で多年勤 本会副理事長村松夢裡氏は半年 今後川雜出雲支部に益々精進 着々準備中とのこと▼国弘王 一時半逝去された。 川雜字部支部結 家業の新聞 昭和五年

出張でない旅一度して見たし

要揚子

旅に居るうち

が

極

楽

0

膳

ン坊

軸・再会の明日夜汽車で要と発

靖国神社臨時大祭に東上

湯の旅をしてから我家寒らなり

妙齢の処女にあぶない

旅の 朝

高いとは知りつく名物土産にし

黨

天・四十年そえば無口で足りる妻 地・白粉の匂いも久し妻と佇 人・猫までが勝気な妻に仕込まれる 佳・愛犬と妻とを批把の陽に撮 住・愛妻は美容体操する若さ 住・庖丁をもつてる妻へ言ひそびれ 住・現実が妻を甘えさせなかった 佳・妻の暗算の方がたしかな夫婦です 要と来て温泉宿のそうぞうし 表情の拙い妻にもある笑 校長はやつばり一豊の妻を説き キャラメルを楽しむ妻の総入歯 東岸子 日 香 不 ひ か平 在 花 眠 波 友 日

旅

長 野 井 蚌

旅立へ小 行づりの旅の親切身にしみて 独り旅らしい 闇米をかついだ村も通り過ぎ 値切つたはよいが旅館のぞくされ 旅先のランブ明治を見付けたり 見えすいた嘘も言ってる汽車の旅 お土産の開く迄子供行儀よし 珍らしく要を労は 旅に寝て妻の ムの故障寒い汽車の旅 用 0 近い 愛情思い出し 女の無口なり る旅の夢 不安あ 喜久治 たけを 卓 荘 通 成 へとち 子

景色にも飽き駅弁の 旅立へ 善人と見えても相宿寝つかれず 旅の宿財布気にして寝つかれず 陣情の旅へカメラもさげて居り 妻と子はデッキで輪投げ瀬戸の旅 寝苦しさ美女横にいて船の 悩みある旅路に寺の鐘をつき 歌舞伎座の切符に魅力もつた旅 新婚のプラン明るき伊 闇米の値を旅先で聞い 旅先の気安さ割 お手盛の議員出張妻をつ 御近所へは旅だご言うて産みに行き 心中する旅へパーマをかけ直し 孫の旅そつと臍繰りたしてやり 旅へ出る父へ土産の念を押し 旅に出る鞄へ母が気を使い 十二月のつびきならぬ旅に出る 旅立へ二号は 急な旅勝手のちがう朝を起き 廻遊の旅のブランへ郷里も入れ 八情を旅先で知る汽車の 労性 母くれ の要で重 別な駅で べも水 の友が出 たい 紐 を 0 解 4 酔 旅 のり 0 0 3 風の子 東岸子 恵二朗 美婦適 代仕男 山雨楼 七面山 朴 T 夜 維 宽 4 直 万 高 蛙 方 悦 鮎 虚 美 天 歩 子 眠 容 志 声

> 手土産のわりに話が大きすぎ 荷札つけかえく一座の旅廻り 朝発ちへ旅の宿屋のこわ 土産屋が多過ぎ土産買いはぐれ 旅の香を先づ病む妻へ買って置き 旅廻りよく酒癖 新婚の宿の女中はい **酔覚めの水飲み旅の月** 4 4 で旅 年 中 0 を 0 容と つそ Ш 宿 を る 0 V 知 0 ほ 飯 男 飯 ま Ш 靖 良 E H 仙 郎 坊 満

訪日の羽田にフラッシュ待ちかまえ

古

心 雨

学の旅行PTA

D:

4

ひか平

日本の狭さを

知った空の

佳·旅 天・山の駅汽車は南画の霧を 地・金策の旅へ熱海の灯がまぶ 住・旅先で子供が育つ 佳・艶歌師の旅へ田舎の恋 住・故郷捨てる旅での知らず子は勇み 住·水筒 住・陳情の上首尾熱海へ下車させる 住・トラックで旅の一座が派手に着き 住・旅先の父の若さを母案 佳・蟹を褒め刺身を褒めて宿 住・アリバイに日々絵はがきを要へ書き 人・ゆく雲を見て人生の旅 もう旅はこりたと足の豆をなで へ出て メションがかきすてた恥を報告し 0 熟さ 男 不逞な気 修 学 芸 旅 行発 K VC かい を 82 病 生 追 浴 起 む き H 衣 代仕男 恵二朗 十九平 香 悦 光 南 灯 春 蘇 淌 灯 蜶 郎 H 址 堂 天 秋

> だより」の編輯並びに同誌川柳欄 役所の堺市保護協会機関誌「観護 回縁風子と改号された。私は堺市 することとした。 を引受け毎号同事業の川柳を掲 た。▼岡本薫翠氏 (摩) (岡山県)は今

岡 田 新会員紹介 青果(岡山県) 二月

風来子氏推薦

IE

Ш 柳 雑 誌

寝てる児も起して旅の土産だし 湯度れが出たとマダムの旅帰り

雄

バックナンバー御希望の方は往復 ガキで御問合せ下さい。 月刊 川 柳 しなの

多久忠

版画と写真 松本市大名町 しなの川柳社

句研究、

図(石曾根民郎)雑詠、

随筆、

古

電刀)柳誌月評(泰)現代川柳地

連載益々好調·川柳時評(石原青

A5日日前 衛三〇四《子門門》

一ヶ年四〇〇円(デ共)

瓶 大阪市大淀區長柄 西通一丁目四四 山銀硝子株式会社 電話堀川四四七零

いのちある句を創れ



投稿規定 団毎月二○日▼投稿先本社宛本開催月日及場所記入▼締にのののでは、一日では、日本のは、日本のでは、日本のは、日本のでは、日本のではは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のではは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のは、日本のでは、日本のでは、日本のでは

新春 川 柳會 (大阪市)

る作家連とて、開会前より会場 健康を祝し、益々川柳道に精進せんとす 九五四年の新春を寿ぎ、併てお互 一月九日 光明 寺

める盛况さであつた。

朽洞優勝カップは決戦に持ち込んで獲得 賞状を十一名に 授与され昭和 廿八年不 追われつの状況で遂に十五対十三で白組 合三分間吟「外出」の課題に、紅白追いつ と、諄々として説かれ、いつも乍ら聞く に詠むこと、表現する文字に注意する事 師の柳話は、師走の出来事の社会事象と 新春らしき雰囲気の句鐘であった。路郎 醇杏の銘酒とも云うべき名句をまじえて なお其上に葭乃女史の「飲んで欲し」の 春号より、春巣、十九平、雄々、しげお 皆出席者に路郎師より揮毫短冊並に努力 人を楽しまされた。没食子氏選の紅白試 夫、十倍、奇童、凡平、魔花麗の諸氏 開会に次いで水谷鮎美氏の句評は、 勝つところとなつた。続いて一ヶ年間 柳眼とを巧みに説き来り、川柳は素直 酒の句について、氏独特の短評を加え

せんとする人々を、尻目に悠々三回天位

は吉村南風郎氏が把握した。閉会九時、 兼題の披講後当夜の不朽洞賞優勝カツマ の真鍋一瓢氏の受くる所となつた。席題

女

平・兵太郎・文夫・一瓢・望峯・紫香 恒明・次郎・白柳子・三男之介・ひろむ 京一楼・春巣・雅巣・梅志・栞・鮎美・ 郎・白水・水茶・一平・一朗・いわを・ 詩子・一茶穂・香林・三司・水客・凡九 峰・静馬・摩天郎・友三郎・六竜子・都 圭三・しげお・彌平・帆加夫・木声・賀 清流坊・没食子・塗杖・省三・文蝶・葉 沐天・葉光・玲人・正斗・十悟・一十・ 方・淡舟・丁路・南風郎・武助・一三夫 小松園・愛論・潮花・葭乃・梨里 出席者=路郎・生々庵・梨花・雄声・古

兼題 麻生路郎選

酒吞みは嫌いと添ふて二十年 眼もとだけ染めて惚れてるようにつぎ 属の酒空気は重しらすぐらし とつておきの酒恩人を喜こばせ お目出度い酒にこせつく癖が出る 冷酒とするめで急な御栄 酒にがし牧水の歌瞳に痛し ストーブに仕事始めの酒が沸き なあちろり今宵はこわいものがなし おごられる方がトコ姐さん酒もつてこい 酒のある間は早ら帰って 酒弱くなったなと友の肩を打ち 年玉酒の気嫌で二度も出 酒へ女であった幸を知 酒まで出るとは会費安すぎる 止めの酒と二三日して気付き 友三郎 望 薬 わを 夫 客

> かくる夜はひとり静かに酔うべかり 特級もあると無理やり上らされ 言いたさに存分飲んだ酒なのに 酒さえ止めりや良いダですと医者の前 医者の手を離れりゃ酒を吞みたがり うどんやでのんであの妓に逢いにゆき 吞み習らはずが師匠をこしていた 酒止めて等とは言わぬ歳となり 親分も子分も酔らてゐる地 さけと聞いては万障繰合せ この頃のさけはで云うて矢張り吞み 禁酒したばかりに来なくなった友 上棟式大工二級へ丸らなり 人間の弱さは酒で物を言 公僕へ紐付きの酒持ち込まれ 仙とは良きかな提げて来てくれる 滴ものまず女を口説いて来 の内少しはいける女客 の留守酒は丼鉢にあり の力で墨痕淋漓 も崩さず心憎 た 南風郎 白柳子 没食子 都詩子 兵太郎 同 同 一三夫 一茶穂 三男之介 **一 蝶** 郎 平香 林

中島生 一々庵選

花嫁を後妻と知らず子ははしゃす 花嫁のうちはまあるい顔であり 花嫁は水が合はぬか病みつどけ 花嫁はのぞかれている顔となり 花嫁へ知らせたくない父の癖 花嫁へ母は嬉しく言い聞かせ 花嫁は部屋いつばいに帯を巻き 親泣かした顔と花嫁見えぬなり 花嫁は皆不束かな者ば ふりむかぬ花嫁の心し 嫁の指がきれいな桜 か る 没食子 南風鬼 南風郎 日本村 小松園 しげお 司

> 額の字が読めて花嫁見直され 故郷から花嫁身体だけでくる 花嫁のぐちむこさんが引受ける 花嫁を見れば気がすむ女達 花嫁のかつら下地がよく似合い 花嫁の売られ行くよな姿なり 云うまくになつて花嫁出来上り 花嫁の郷愁ロスアンゼルスから 花嫁の希望の誤差が二階借 民法を知る。花嫁の強 花嫁にみんななりたい子の遊び 花嫁の算盤たしかな音を立 花嫁の方が大きな足袋を履 花嫁へ富士と熱海が残るだ 個性ぬりつぶして花嫁姿出 花嫁の眸は白浜へ来て展 花嫁を間違えそうな汽車に乗り 花嫁の顔を写真屋いらいに 花嫁の又覗かれる牡丹ば 二等車で花嫁嬉しく囁かれ 花嫁がパーマになつて喋ること 花嫁が晴れ着をぬいだ共稼ぎ 花嫁を乗せた新車の軽 の村を花嫁狭ろ出る くゆ い意志 \$ しげお H 玲 生

一初風呂 清水白柳子選

初風呂を知らぬ二階の不精者 **範剃つていて初風呂で引いた風邪** 初風呂の指紋の皺を美しみ 初風呂のお加減聞いてる薄化粧 初風呂をたてた母のしまい風呂 初風呂に今年も母は達者なる 初風呂がクシャミしながら帰って来 生々庵 賀

観衆の動きもテレビ写しとき 全勝の力士へテレビ少さすぎ

自動車の道をふさいだテレゼジョン レビもっアンテナ税吏こまかせず 同 朗 平

サラリーが追付げそうもないテレビ テレビジョン終って足の疲れ知る

応は定価丈け見とくテレビなり

六竜子

客引に使かれて居るテレビジョン お使の道草又もテレビジョン 席題「テレビジョン」西いわを選 + 悟 声

生きている幸初風呂にひごり浮く 初夢もなし初風呂は混んで居り 初風呂を焚くも矢つ張り女房にて 初風呂の戻りの鼻で雪がとけ 初風呂もやつばり垢の浮く時分 白柳子 凡九郎 司

貧しさを云わず初風呂たく煙 初風呂へ此家の嫁のあとを脱ぐ 初風呂で餅の胃袋持てあまし

季

風呂へ今年の目方かけて見る

しげお

利風呂にもう起された寝正

席題「とつておき」 正本水客選

うれしがりおだてられてるとは知らず られしがりおんなじ事を又喋り 福笹で芸妓に打たれられしがり

友三郎

白柳子

彌

平

日本の文化テレビが塗りかえる テレビ今笠置シッ子の口の中 テレビジョン天皇様を寝て拝み テレビジョン思いがけない背の低さ テレビジョン天皇様も震えられ テレビジョンこにつも丁度い、加減 テレビが当り寝る所ない長屋 テレビジョン案外まずい顔ですな 子が出ると云ラテレビを見る喫茶 ひん曲はた顔が売り出すテレビジョン 白球を追うテレビへ積乱雲 生々庵 玲 三司 しげお 生々庵 古 助 歩 巢 飄 方 られしがり女の仕事引受ける られしがり派手な靴下はいて来る 此れしきの事へ思春期られしがり うれんがり風呂へパツデをついて行き られしがり今度は白い羽根なっけ られしがりあっさり幹事引受ける 日曜の朝きつちり早いられしがり られしがり馴染の前で一寸てれ スクーダー用もないのにうれしがり おみくじを大事にしまううれしがり あほでっさかいと若く見られてうれしがり られしがりにされるほにされ使われる 何処へでも顔を出してるうれしがり 帆加夫 南風郎 六竜子 都詩子 E 紫 恒 E 同

斗

巣 斗 初風呂で子供が話すお年玉 初風呂へ子供の足袋がかたすぎる 初風呂へ女房同志の声もする 初風呂のタオルサラのを出してくれ

凡九郎

司

膏薬も見せてテレビの東富

湯の街の今朝は初風呂らしゅう明け 初風呂で浄めて仕事始めする

生々庵

利風呂に昨夜の夢を流して来

南風旭

平

初風呂で暮れに儲けた髭を剃り 初風呂の故郷でしつけ糸をぬき 貸借りに触れず初風呂長閑なり 初風呂へ行く丹前のシッケ糸 初風呂へ番台五ツ若く見

初風呂に番合の娘の日本髪

文 木

声

ヒット打つたらしいテレビのさわがしさ ホームランのここでテレビは聞えない テレビ今早慶戦の人だかり テレビジョン線が走って消えちまい

文

夫

両国の土も手に取るテレビジョン

摩天郎

文

梅

志

「られしがり」長谷川 三司選

悟

こっておき足袋はき替えて来る騒ぎ とつておきの話を持って見舞に来 友達を帰してからのとつておき 水 交 茶

こっておき米櫃の中から出して来る とつておきの酒でじゃく意見され こっこきを分け合うで酔ら久し振り とつておき時効きてから聞かされる とつておきの笑顔で女将やって来る とつておき課長に次を明われる とつておきの寒卵立つてのみ とつときの酒あるうちだみなこいよ とつておきの旦那もこのごろ来てくれず とつておき出して幹事は飯にする こっておきちゃんと子供が出して吞み とつておき潮時と見て出して来る 前口上長くきかせるとつておき とつておき我田引水とはなりぬ 珍客の好みに合うたとつておき 梨 生々庵 凡九郎 しげを 葉 古 文 紫 鮎 賀 文 望 花 巫 峰 方 花 香 美

南風的

香

夫

馬

Œ

外出に要細々と気をつかい 外出に馴れてアリバイらまくなり 川柳紅白試合「外出」 市場役食子選

られしがりこけしが転げただけの事 二つづ」階段を飛ぶられしがり られしがり信号無視をしてしまい られしがり女の下駄で呼びに来る 大吉のみくじ又出すられしがり られしがり見たいな父のペレー帽 おだてられいつも損するうれしがり 阿果なこと言わんごいてたうれしがり 悪人の人相でなしられしがり

司

生々庵 都詩子

外出は二人で恋の御堂 娘今日逢ひに行きます化粧する 外出の夫案じ 電話電話外出と夫人らつくしい 外出へ犬も駅までついてゆき 馬で外出虎で帰って 父ちゃんの外出マ、の下駄で行き 外出の眼に真っ直でなアドバルン 外出もわきまえている女秘 外出は狐を卷いて犬連れて 守護神と呼んで千円卷き上げる 失恋をしてから金色夜叉を読み 盛り場を帰る煙草の箱の数 ヱビ或る日腰が伸びねミフトなげき 松 年頃の娘外出 外出は鏡の前に一寸 水引きの義理へせわしい外出着 外出の妻の化粧を待つ煙草 号外を持つて外出良つて来 いゝ服が出来て外出したくなり 折角の外出晴着ぬらすなり 外出の子にハンカチと追いかける 外出の晴着が口惜しい雨となり 外出から戻りボケット調べられ 外出の先はいつものバチンコ屋 外出へ月賦の服と靴をはき 外出に送るウインク良い家内 外出の傘持つて出る用心さ 遺伝したらしく大酒吞みになり 阿倍野支部新年句会(大阪市) 月十六日 手間 る空模 於 が ٤ 立 西光 須崎豆秋報 来 力 ち 友三郎 小松園 摩天郎 しげお 寺 紫 潮 1三夫 水 雄 京 桃 IE 水 明香 助 花 客 司 声

香 明 光

いつ来ても風邪気味らしい大師匠 風邪気味へ旦那が風邪を引きそわせ 絵でみれば守り神なる恐い顔 書斎から風邪気味辞書を持つて立ち 風邪気味ののとが女将の三味にのり 京マチが好き封切はかくさない いふなればつたへつたべて浮気症 路 凡 梅 沐 貴 梅 恒 九郎 郎 里 天 Ш 朗 志

雑川 備前支部句会 (岡山県)

初夢をきれんしに見る寝正 パチンコですつてしもうに残り福

月

杏

花 朗

悦

十二月十二日 於 大森娯句楽居

念仏を唱へ姑寝てしまい 千切れても一念襲つたかにの爪 十二月又そろばんを入れ直し ほほよせて油気のない髪と知り 家出してから爪染める娘に変り まじないに手を汚される墨をすり なんとなくてんやわんやの十二月 やりくりの大詰に来 大儲けないかと思う十二月 さいそくを受けてつんほはそつほ向き 童話劇かに真直にあるいてる の道理がぎくりぎくり来る た十二月 浜田久米雄報 運平子 東岸子 みや子 久米雄 柳穂 甘井子 清風 娯句楽 柳風子 淨 洲

年忘れ扶養家族に取

りまかれ

悦 三

帆加夫

生

夜 朗 司

杏

水谷鮎美報 阪神ビル 雑川

梅田支部句会(大阪市)

十二月二十六日

於

日立櫻島支部句会 (大阪市)

年忘れほんとに酔うた手をたる 借金はまだそのま」の年忘れ 年忘れオールナイトへ踊りぬき 年忘れ奄美の酒は日本酒 年忘れ茶菓子で女よくしやべり 酒嫌い食らだけ食つて席を抜け

一月十一日

帆加夫

十二月十日 於 日立造船楼島工場内 丸尾潮花報

年 割勘で来れば案外吞める口 気苦労な間借りまだしっつつきをう 案外なびごに出逢うたホテルの灯 気苦労をさせる多趣味ないこであり 気苦労をして貰い子を育てあげ 雑居して妻の苦労が眼にあまり 気苦労がつづけばヒスになる恐さ 花嫁は無口な父へ先に縫 気苦労があるとは見えぬ太っょう 信仰の身に案外な過去があ 気苦労をしつゝ二階に家田の娘 寄が案外若い声を出 千代美 ひさみ 潮 望 秋 清 潮 花

鮎 三重

美

残り福吉兆

売りの声もかれ

ちびた下駄社宅の子等はよく育ち 入水のここからさきはエキストラ 角帽のまくエキストラに使りれる 眼鏡越しそれでどれ程いりまんね 女湯もやつばり熱い騒がしさ 疲せつばの良心的に気を使い 初夢もやつばりお金が欲しかった

ゆずる

カレンダー休みの続く日を探し カレンダー母は憶えの墨をつけ 負ける気の客に値段をつけさせる

同

満

纒つた縁に暦が持ち出され

穂波子

月十日

骊

平

杜

的

凡九郎

正

斗

引揚げた夫案外変つて 幼稚園へ行く隠し子を引き合せ ず 水 錦 水

雑川 鳥取支部句会(鳥取市

十二月十日 於 いすば販売所

折合わぬ値段算盤たてたま」 農民は石一万と言ふ叫 笑わせて値段を下げる叩き売り 母の愚痴子の愚痴父は無言なり オモチャの値子供の好みと折れ合わす 言い値では絶対買わぬ母であり 結局は値段の安い方に決め 値段表見てから妻もあきらめた 散髪が半分夢の中で済み 散髪の合間 恋すれば散髪代がかさむ事 無燈火の親子手帳へ書き込まれ 大過なく過して嬉し大晦日 大晦日やつと安堵の猪口を取り 吞み明すことに決めてた大晦日 大晦日今年も鬼になるつらさ 障子張る母の手つきも大晦日 将棋の助言もし 大西八歩報 たかし 法泉子 耕 たかし 遊 日 八 遊 八 日 陽 喬 同 北 民 満

故郷は晴れと賀状に書き添える 孫に歳間はれ淋しく屠蘇に酔い 三ヶ日振袖着たり服着たり 昇る陽にこの一年の掌を合はせ 夢にまで見た昇給が二百 体 の昇る階段急に見え 19 芳 道 たかし 三步

番台の向ちに妻の肌が見 女湯がしばらく空いた俄か 復せつぼの多弁へ動くのど仏 痩せつぼちこれでも筋金通っては 残り福チボあきらめた歩きよう 残り福ひまな女給にとりまかれ

え 雨

飴へばりつき

版写謄田阪

五町田芝区北市阪大

 \mathbf{H}

九九五島福 話 電 番四~一三六五

スケジュール全部変更寝正 三ヶ日酒が夜屋違えさ 春の膳子供の年を聞き返えし 晴着きる日はなし母 お馬にもストップ英語解るらし 福の神わしのとこなど見もせんご 待たされる酒屋と馬は知つている 空腹のまゝで馬券を二枚買 勝馬の脚 競馬場留守居の筈の妻に逢 馬の眼も後のトラック気にして居 金一封竹馬の友の顔をたて 初詣島田がジャズを口ずさむ 年始客飲まねばすまぬ顔も来る メ飾りつける所もない間借 ほろ酔で春のワルツを聞く炬 松活けて再びは来ぬ新春を寝る 松葉杖ここらあたりがばかすぎ 真つ直ぐにのびたく想う庭の松 宋転へ酒慎しめと言っただけ 春風を軽く切 0 松 0 b 月 b 世 内 法泉子 耕 喬 日 小 吾 日

雑川 篠山支部句会 (兵庫県)

十月十八日

小西無鬼報

カレ 商店街今日もひばりの唄で呼び 虫の喰つた毛皮へ坐り斜陽族 熊の皮張つて北海道 戦争中どこで暮した 生字引と云はれて庶務の関にあり 生字引勤続してた丈けのこと かりそ 運転手毛皮の客も 退職の惜しまれている生字 たまにした約束ストで果されず 一貸しの毛皮の服装も情らしい ンダー取かえて聞く除夜の ンダー店主の智性 8 商 0 店 約 街 束 K 娘 犬が吠え 0 毛 油 4 21 疑 皮 断 う二十 は 中 반 凡九郎 南風狼 凡九郎 摩天郎 同 同 かし 声 苗 声 助 山 水 水

E

雑川 堺 支 部 句 会 (堺

父ちやんの計画積木と嗤われる 今年から出張旅費を貯めとこか かつちりと計画たてし年始に出 月始め末の月賦が気にか

ムり

尋

四

ひろよも

玉

月は残す気持の月始

月始め父の威厳をとりもどし

びか平

鬼

無

聖

然計簿へほっとしたよな月始め

今年こそと決めた日記をつい忘れ

みちを

鬼

の馬はしんどかろ

元旦の計は競馬ときめて わが春を迎えた絵馬のいきり様

寝る

琴 波

五年越し計画のみで家建たず

尋

年賀状友の

出 言う正

世が思われる

小田原 緑之助

スクリーンはわが思い出のシーンこなり

紅が語る想い出聞いて吞み

鬼

未婚ですと

月の晴姿

芳

風

病院

廻

送された年賀

状

巷 奇 交 笑 游

解散を予期した様に質状来

3

からと名だけ見てゆく年賀状

年賀状が

一年振りの筆

上とら 心い出

也

年賀状質つて借金思 選挙前知らぬ人から質状が

汲 残

願母子は飲み屋へ払り種にする

十二月十七日 市

於 摩天郎居

木摩天郎報

哇川 支雜部布 ウイ 口一社句会 ヘハワ 1

於 彩 民 居

ピクニック人に喰べさす重をさけ ピクニック隣の寿司へ内のすし ピクニック厚化粧して野心あり 方言を丸出しにしてピクニック ピクニック何でもかでも拡声器 クニ カニ 愁をそくる校歌もピクニッ ツク椰子の間 ツクあこの始末は下戸にさせ を梯子 古川魔花麗報 泉 同 峯 拝 旋 野 暁 修 風 港 **QIS** 水 舟 雪 Ш

ピク F. E クニックカマニの陰で寝て帰り ツク弁当にまで見栄を張り ツクカナカワヒ子と云う姿 土人の女の恋 快夢起 紀南児 有

恒例の寸志中味をあけずあ

ピクニック恋になるとは知らず撮り

草

郎 朗

電柱を数えて 赤くなる話素面

教えられ

でする

年

2 E

ヤツ

ターの音あちこちピクニック

迷

酒の席 精神科母

d

扇太皷

は強

<

打

0

愛情だけを

待

町人が又ねらはれる試し斬 町人の今日は紋付着る仕事 医者は医者株屋は株屋のカレンダー 雑川 めくりを三枚めくる忙がしさ b 南風旭 たかし 摩天郎 翠

借り馬で

乗馬姿を写

しとき

今年こそうまくあてたし馬の穴

みちを

出雲支部句会 (出雲市

ピクニックゲームにはしゃず若返る ビクニック母は自慢の重を詰め

煙 晴 芳 柳

ピクニック所詮は吞るに行くつもり ピクニック余興係と云うリ

ボン ツカ

儲かつてから競輪が止められず

弓削支部句会 十二月五日

於

黒田滋天居 (岡山県) 名刺には書かぬ仕事で儲けてる

ほなみ

妻揚子

酒よりもダンスと変るピクニ

ピクニック今日は妻の受難の日

心い出 月七日 於 出雲市公会堂 平井芳風報

思い出をあてはめてみる「君の名は」 水仙の匂いに君を思い出 がこの駅にありちつと見る 人 治 勇邦 女 語 ピクニックはしやぐ妻の声若し お供養の後は墓前のピクニック

雜川 下関支部句会 (下関市

さとみ女

社長へは自筆で書い

た

年賀

状

質状移転通知も兼

ね

て出

来

賀状疎遠の詫びも兼ねており

野

電柱 家並に来 バチンコで儲け酒屋で酔いっぷれ 宜伝の手帳寸志とし 気の弱い男素面で来 値踏した寸志値踏みを上廻 開けて見てほんごに寸志だなご思い 電柱も書いて田 ひと儲け祈る饗銭ふんば 愛情が世間知らずの子に育て 儲けたら来いミ云うよなウインドー 面の記事が前途を暗くする 一本立 月十五 て寒行 のピラを 舎 は 声を出 の案 C たを悔 於 とってき 石川侃流洞報 つし 貼 内 侃流洞居 b V × ポリチ 伊三男 個 爽 司 半 良 同 同 同 柳 砂 蛙

床へ

友の

賀

状が

嬉

<

投句用

柳

HI

(五〇枚綴) 三〇円

柳雜誌社特製

到くさそうにハンコの年賀状

仕事止めべれに大きく背伸でする お勝手にドッシリ寸志ビール箱 情の苦しさ締めきれずゐる へ夫人素面でかしこまり た道 增 5 5 h 藤四郎 古苦柳 みつる 土筆坊 鬼 かうたる 銀 妙法等老 梅里の店

円

東京そばを灘一とすじ アベノ橋地下映画食堂街

畳へ

年

賀

状

かい

つき

秀

雅

膳所新三報

新築はしたが税金気に

b

迷

路

故郷の味を雑煮にかみしめる 日記帳今日のコースをたどって見 嫁が来る準備日記が灰に 三ヶ日餅だけの日を送っ 初夢を見たとはらそのつき初め 初夢の全部は妻に話され 寝返りをうつて初夢ちよんずられ イニシアル母には解けぬ年質状 白秋の詩がそえてある娘の賀状 なり T 牛 奇 文

借金の詑も含めて賀状つく

業

質状滅つて昔を歎く

長患みに年賀状すら寄りつかず

やせ男

三等でも当つてくれよ年質状

年賀状同じポストで取りかわし 当つたら山分けだよと質状出し

ATX

緑談に遠く婦長 股火鉢課長は坐 死んで行く不孝も詑びている日 内容を恥じる日記を忘れて は 骨神経 よく太り 痛 来 記 七面山 北 児

今宵から妻と言ふ名の日記つけ 初雪へ去年の日記繰ってみる

馬の絵は笑いの

種の年賀状

詣で娯と拝んだ赤

V

爪

大三郎

年賀状次期の選挙も出るらしい 不味い字を気にして出した年賀状

横寿喜

秀 星

不

酔さめは派出なチップが惜しくなり 縁談が決つて牛を売る話 三十の縁談あせり気味に見え 児 御 縁

は「のレンズが覗く初詣 初詣り後は炬 ボーナスの結果できめ 利益は電鉄にあ 結 び 願 5 燵 二 人 の膳 た初 る 初 初 計 詣 詣 喜多八

天

初詣家でおみくじ読み直 ATX 文 糖 春

龍やはり和服で良く似合い 園

酔ざめの水にも管を卷いて居る

大聖寺支部句会(石川県)

初

月十七日

於

福貞人居 野村味平報

徹夜して年令も気にせぬ初 初詣り祖母さんの長い拝みよう 次々に帯締めてやり初 若水のひしやくが匂ふ初 客寄せにあの手この手の正恵方 能矢張り日本は神の 平児力 天豆鼠村道

医南師会区 杏 林]1] 柳 会 (大阪市)

金策は計画

だけの嘘も吐き

木平

筆のプランどころか今日の糧

浜寺病院支部句会

(大阪府)

計画が外れた父は腕を組み 補助金が足らず計画たて直し

t

H

本髪我が世の春と初

園

科学者もおみくじ引いてる初詣

篤農の村葬 馬

0

供

がつき

郎

馬にけられた疵跡酒の

話 にし

羊

小舎は餌持つ足にいななきて

十二月二十二日 於 長谷川迷路報 一伸 居

> 賢さが妬けず氷のやらに生き 真実の心に触れて何を妬く ゆうべの夢が気にかくるのよとやいている この年になっても格気やめられず 年末のこの忙しいのにやいてゐる 顔の疵やきもちでとも申されず 六十を越した嫉妬が記事になり 呼び鈴え御機嫌らしく午前二時 駅近く架夜を稼ぐ人の群 新築の先客はもう酔らている 悋気など思いもよらぬ暮し向き 嫉妬も口まで出さぬよい女房 サービスもよいが嫉妬も並以上 やきもちが匙をなげてる梯子酒 終電の弁解女房鼻でき 滞納も新築もしてすましとき 新築に母神棚の位置をきめ 新築の座敷に採も気兼ね れ 生々庵 阿茶 生 生 珊 阿 阿 一々庵 一々庵 枝郎 哲 茶 舟 茶 伸 茶 路 JII 郎 舟 茶

川柳友の会句会(大阪市)

月十五日 於 帝国化工泉尾寮 佐野白水報

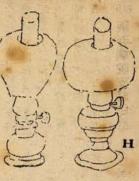
嫁ぐ娘へ娘同 前祝したその場からけちがつき ゴミ箱を提げたとたんに底が抜け ゴミ箱をぶちまけてゐる当りくち ゴミ箱のゴミ派手に洩れ子沢山 ゴミ箱が其の家のくらし知って居り 大笑いのラジオステレビ欲しゆうなり ミ箱に頭あずける酔つばらい 志 の前 祝い 京 一楼 平 酔 朗 始 水

> 前祝はや儲けてる顔で飲み 昇進の噂無理矢理おごらされ 前祝いした商談を取消され 明和病院川柳 会 (西宮市) 雅楽太 英 白 治

品質像 大阪市東区豊後町四八 立川商事株式會社

十月

車までニュールツク友は澄ましてる 眠れぬ夜下駄の音にも腹を立て 無駄足の下駄キッチリと揃えられ 滅らぬ下駄淋しく見詰める三年目 自動車に乗せてしまえばしめたもの 自動車を手前で降りて露路の奥 花嫁やで気をつけてや自動車はん 裏街へニュールックで来る視察団 入院の荷に新しい下駄を入れ 山本九里三報 和久井 成 朴 白 六 朴 白 馬 息



カナで書くことをおすすめした 応たしかめて見ることである。も 思われたら、必ず辞書をひいて一 なものである。なんだか怪しいと は、茶碗にニューが這入つたよう し手許に辞書がない時にはむしろ が、その文字が当て字であって を表現するものは文字である

変な感じがする。これが馬耳東風 もないが、文字で書かれると一寸 である位なことは判るが、これで ば、バジトウフウであつてなんで のがあつた。これなどは耳で聞け 投句の中に、 位では意味のとれないのもある。 は折角の名句も光らないことにな て字を書かれてあつて、一読した 選句をしていると、随分変な当 「馬事投風」と云う 名乗る人が多いせいもあろう。

雅號のこと

呉れた人があつたそうだ。それで 云つたが、女性だと思つて手紙を 橋本緑雨君はその昔、二柳子と

郎 生 麻

ない。と云つて、漱石や鷗外など 斉藤緑雨が川柳家でないから別に かも知れない。子の字のついた古 い。岡田鹿の子君も鹿の子女史で のであるが、まだそんなのは出な と云う川柳家が出て来ても変なも かまわぬと云えば云えないことも が、とうくく緑雨で押し切つた。 があるので、一寸どらかと思つた 緑雨と改号した。緑雨は斉藤緑雨 い川柳家では岡田三面子博士など ハガキが来るそうだ。これは岡本 平の妻君の鹿の子から来る連想

の水月などは男性と間違われると の奥さんの湖月、市多楼の奥さん に女性の匂いがするが、七面山 などは子の字はつかぬが、どッか のつかないのがかなり多い。 莨乃 しかし、川雑の女性には子の字 のついたのが多い。これは本名を 5。女性川柳家の雅号には子の字 と間違われるおそれはないだろ いても三面子、風来子などは女性 が有名である。同じく子の字がつ 思う。過日も梨里を男性と思った 子の字がついているが、コレも男 風変りで面白いと思う。風の子は だの、風の子だのと云うのは一寸 来ていた。女性で茶々だの、阿茶 のであろう、梨里兄と云う手紙が 合はないようにしたいものであ なるべく新らしい作家が改号する きそうなのはなるべく避けた方が 君の要君は若菜であつて子の字は 性と間違われそうな雅号だ。香林 あるかないか位は研究して、かち ても雅号をつける場合には先輩に をくつつけたのはある。何れにし が、友路郎と云ら式に、私の雅号 選に路郎と云ら雅号の投句はない 思えないのである。さすがに私の た。それが知つてつけたようにも り、紋太があつた。飴ン坊があつ いたら、三太郎があり、水府があ は自由である。新聞柳瓊を選して い作家がそれを機会に改号するの ようにしたいものである。尤も古 するのはまことに厄介であるから 号した。同じ雅号が出る毎に改号 れで一番古い牛歩君が、白水と改 雅号を持つた作家が三人いた。そ いい。「川棚雑誌」に牛歩と云う だと思う。雅号で、誰でも考えつ ついていないが、女性らしい雅号

眼に映ると選句をするのにあまり いい気持はしない。 ならない。しかし、そんな雅号が 永続きしないから大して問題には 号の持主もあるが、そんな作家は それから、随分、人を食つた雅

本田恵二朗氏(岡山県)より 一路 郎 宛一

川柳銘々皿、二楽さん所藏のもの 朗が指命されまして、恵二朗が永 となっていましたが、最近二楽さ の、展覧会に出品されていました こ半年ばかりは、恵二朗所有をか にウョくしておりますので、こ す。垂涎三千丈が、そこらあたり つて正に天にも昇る喜びでありま りました。このことは恵二朗にと 久に宝物として保管することへな んより、その保管役を、この恵一 (前略)先生の五十年記念の時

ます 謝し謹んでお知らせいたし 氏に対し生前の御厚誼を拝 眠されました茲に川柳人諸 区浄土寺真如町の自宅で永 前一時三十分に京都市左京 活も空しく去る二月五日午 村松夢裡氏が半歳の寮養生 に川柳雑誌社京都支部長の 川柳不朽洞会副理事長並 昭和廿九年二月七日

川柳 川柳不朽洞会 雑誌 社

麻 生 路 郎 水 武 書 房 版

川柳を研究したい人々に好適の書

ある。敢えて一読を薦む。 は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得するこ から説き起して収むるところ三十七講、平明で、親切で初心者 とが出来る。多年川棚している人たちにとつても亦好参考書で 指導書として唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」 本書は著者が多年ウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新

取次御注文は B六版 大阪市住吉局區內市代西五丁目二五 照替り座大阪七五〇五〇 雑 社

(二一二頁) 改正定価一三〇円

同

舟

近

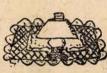
與党野党そも源平の昔より サボテンに似たるお方が高級車 パチンコへ婆さんの眼のいやらしい 松山市 前

煙皆なびいて都市を威圧する 紙一重そんなセンスは邪魔くさし 大阪市 麻 生 葭 75

挿入のキチェン私見も少し入れ ・HEALTH」見てまだ生きのびる然を出し 快夢起氏より雑誌をいただく(三句

詠

どと考えております。あまり鼻を ずれ機を見て岡山句会へ持参、大 こうかと思つたりしましたがーい せんので、ハクジョウさせて頂き おります。川柳銘々皿の存在を明 正に生涯の最良の年とはこのこと ようなことがあつては一大事、ま 高くし過ぎて遂に鼻先が化膿する いに自慢の一席をブッてやろうな ました。暫く先生へも内密にしと かにしておかねば気持が落つきま 分ないものと、心中ウズノへして を一度せしめてやつたら先ず申し と心得ております。これで知事杯 かないはず)とを獲得しまして、 川柳銘々皿(これは日本に一つし 母や兄と共に観賞させて頂いてお すー〜自重しまして作句街道へ精 ります。今年は山陽川柳の一席と くしておくつもりでおります。老



つた。芳泉氏論は既に山雨楼先生 うな、喃々と味あわれる句が多か 席され、その服装のように氏の句 今更のように芳泉氏と竹原で句会 は、何にか情緒がにじみ出てい にはいつも和服でキチンとして出 永眠されたが、芳泉氏の娘さん いた黒本芳泉氏が昨年十月一日に て、四畳半で爪弾を聞いているよ を開いた事が思い出される。句会 (晶子さん)からの新年通信で、 本誌の近作柳樽欄で活躍されて

> 祈りします。 て、芳泉氏を偲びつム御冥福を御 二十八年の川雑から主な句を抜い が川雑に発表しておられるので、

伍

健

源氏の君のかけらも貴男持ため

看護婦に気の小さいのを笑われ

響して今更狭い台所 あれ程に言ふてた君の片便り 悪いことばかり女房の里に知れ 生き抜かん悲願片肺駄目なれど 悲しさは酒に吞まれた父の顔 愛すると言ふより惚れて愁しい 家田して都会の夜が怖くなり

貴男がその気ならと臍繰りがば 前掛を外して要も少し酔ひ

からくりがばれる日までの教祖 スキ焼の一足違いネギばかり 世間体ばかりを女苦労がり 山羊よもつと寝させろ正月だ 歌舞伎の美だけを外人観て帰り 望郷の年々つのる歳となり 旦那でも取ろか湯銭にさへ困り 群雀に我田ならずも鳴子引く 老妻にこんな爺が妬かれたよ

盛り直すらちにイチゴは腐りか 美しいだけに哀れな脳異状 検問に折角の耐腥めちまい 一と山にされるキウリのどれも

さあ殺せくが何時か寝てしま

によろしく申上げて下さい。草々 御自愛の程祈り上げます。御奥様 進する覚悟でいます。寒さの折柄

> みなさまにお 讀者倍加運動につい

底なしとげることが出来ないことを痛感いたします。堅実な ありません。愛讀者の皆様の强力なお力添えがなければ、到 か本運動に全面的に御協力下さいますより切にお願い申上げ い方に、特にすすめていただきたいのであります。皆さんの の人達や友人の方々で、まだ「川柳雑誌」を講読されていな 発行と内容の充実、詩価の低廉で大好評を博して居ります。 しては、総力をあげて目的貫徹に直進することは云うまでも 動」を展開することにいたしました。川柳雑誌社といたしま いよ重大さを想わされるので、本社はこゝに「愛讀者信加運 「川柳雑誌」を皆さんの手でウンと発展させるために、どう 「川柳雑誌」を一層よりよい柳誌にするために、貴方の会社 近ごろのきびしい世相から考えても、本誌の使命のいよ

讀者應募並びに紹介規定

★読者に応募される方は誌代半ヶ年分二六四円(〒共)をお 払込み願います。讀者騰募と朱書して下さい。投句用箋を 一冊贈呈いたします。この特典は四月末限りといたし

★ 応募者五名以上(誌代を取纒めて送金)紹介して下さい 者には贈呈いたしません。 は六ヶ月分を贈呈いたします。五名に達しない場合は一名 ました方には薄謝ですが本誌三ヶ月分を、十名以上の場合 に付一冊投句用箋を贈呈いたします。但し紹介された応募

★応募者並びに紹介者は住所氏名を出来るだけ詳しく楷書で ★誌代のお払込みは小為替又は振替口座大阪七五○五○番を 御利用下さい。(切手代用可)

★入門も奥義も『川柳雜誌』 お願いします。 ——川柳雑誌社愛讀者信加運動係 から

のではないなどと、簡単に片づけ るから、本筋の作家は作るべきも た。時事吟は第二義的なものであ 談会では「時事吟」をとりあげて見

公私雜記

かすぎるようだ。 豆秋の句に、 ★だいぶ春めいて来た。少しく暖 降りる客いとのんくくとつ

りした気分にして呉れない。暖冬 勿論のこと、葬式万端をととのえ 異変で既成服屋が潰れたり、汚職 とつづくなりと云うようなノンビ 先の電車の客を詠んだものらしい そうかと思うたら、 が、近ごろの世間はいとのんく と云うのがあるが、コレなどは春 な世の中で雑誌や新聞の選句に追 て自殺した女アンマがいる。こん 旋風で議員が慌てふためいたり、 自分の墓は

けではないと云えば判つてもらえ ただたんに句をまとめて出しただ ない。早い話が、句集「旅人」が、 えすればいいと云う訳のものでは ものにとつてはピッタリしない。 そんなに難しいことではないと思 が、一人が一人を殖やすことは、 とが出来るからである。一人が それだけ本誌をよいものにするこ 読者の倍加運動を展開している。 ると思う。★本誌では目下盛んに と云うことは酒そのものを吞みさ 話をしても判らないが、酒を吞む 閣をコップで 否む手合にはこんな ぬ家へ行くと、徳利でも、盃でも で大いに愛用している。酒を呑ま うてはやらないが、名工の 人をと云う言葉がよく用いられる 一人でも多くの読者が出来れば、 高価なものは出すが、いける口の 特に御支援が願いたい。

口をもらった。僕は特に晩酌と云 酌用にと云つて備前焼の徳利と猪 かつたからである。★M氏から晩 ていくか、どうかを検討して見 作なの

雑川]1] 柳 祭 弥仮

を制

本誌に副 主幹制を

★本誌が内容の充実と飛躍的発展にともない編集上経営上ます。 ・ 主幹が選任することになつた。★副主幹は主幹を補佐する。 をして努力を惜しまれなかっただけに今回副主幹としての自 として努力を惜しまれなかっただけに今回副主幹としての自 をして最適材と信ずるものである。従来本誌の論説床中 として努力を惜しまれなかっただけに今回副主幹としての自 を指しまれなかっただけに今回副主幹としての自 をして最適材と信ずるものである。従来本誌の論説床中上 を対しまれなかったがしたので、茲に御政選氏が二 を指しまれなかっただけに今回副主幹としての自 をして最適材と信ずるものである。従来本誌の論説表員 としての自 を対しまれなかっただけに今回副主幹としての自 を対しまれなかっただけに今回副主幹としての自 を対しまれなかっただけに今回副主幹としての自 を対しまれなかっただけに今回副主幹を補佐するの を対しまれなかっただけに今回副主幹を補佐するの を対しまれなかっただけに今回副主教を補佐するの をおいるの。 を記述しまれなが、第二副主教に表述に をおいるの。 をないるの。 をないる。

惜しみなく書いて欲しいものであ

るだけでは、いつまで経つてもい

っているか、いないかを点検す

OSK

会株

社式

雑誌が届いても、自分の句が

作家にはなれない。★本号の座

大阪市東区糸屋町

丁目 四 五 番

話東

(1)

七

来ていゝものだ。★前号は異色の どをきくと多少は心にユトリが出 句に没頭したあとで落語の囃子な

ある読物が多かつた。誰も彼もが

既製服 毛織

物

製造卸

いかけられていると、ノンビリど

ころの騒ぎではない。★しかし選

座席指定・ノンス 名古屋まで 字治山田まで プの豪華列車 2時間55分 2 時 間 8.40 16.40 7.40 14.40 六 缩 特急券は5日前から発売いたしております 案内所 @ 3131•1970•7020 @ 7713 @ 8881

日本公司

Printed in Japan

(載磚禁) 昭昭

和廿九年 三 月 一 日発行和廿九年 二 月廿五日印刷 一ケ年年

大阪市住青局區內方代西五丁目二五番地

大阪市住害局區內方代西五丁目二五器地

麻

生

二郎

行所

اال

柳

大阪七五〇五

定 価

(送料四円)

五二八四円

雜誌 第第 三九 号卷

の投句は不朽洞

●『川柳塔』

B列5号

毎

月

回

一日発行

▲『課題吟』

を募る。

来る。

一『近作柳樽』は一般作家の雑吟所氏名雅号を明記する事。 は何人でも投句が出

定

稿

規

(何月廿日時切)

文章(評論・研究・感想其他)

川柳 塔(雜 詠)麻上各事實近作柳樽(雜詠廿句)麻生路郎選

每

号

集 (四月二十日餘切)

募

黑川紫香選

(廿旬) (廿句) 土井文蝶選

+

才代

Ł

ステリー

(廿句) 河村 (廿句)

利轉

子勤

課題吟募集 (三月二十日轉列) 日満選

THE SENRYU ZASSHI

NO . 3 2 2

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.





